

伽羅先代萩

天地の開け始めし昔より、今にかはらぬ妹と背の、契の末の樂しみは、女夫暮しの世帶事、手鍋提けるが眞實の、誠の戀の睦言や、五十四郡の御主、冠者太郎義綱公、今日吉辰の宿這入、都離れし舟岡の、山の麓に手を盡し、綺羅を磨きし葛屋ぶき、勝手賑ふ客まうけ、島原に名も高尾とて、盛あらそふ太夫職、手づから炊く白水も、流の粹な襷かけ、御大將はまな板に、きざむ鱈も五分切の、國分煙草を禿の楓、「お氣が盡けう」と長ぎせる、「ホ、コリヤよう氣が付いた。コレ太夫、イヤこちの女房ども、そなたもさつきにから米洗うて、定めて肩がつかへう、マアくく一休したがよい」「アイくく、私より殿様の、仕付けもなされぬ切りきざみ、嘸お肩が痛みませう、よつ程久しう洗うたりや、是で大方よいで有る、是からお粥をしかけう」と、いふに楓が小利口に、二人して舁く米炊桶、二つ竈に金の釜、玉をのべたる玉だすき、伽羅割よりも持たぬ手に、割木の刺もいたくし。奥より太鼓遣手の夏、「ヤレくく、お二人様なが

ら、嘸お嬉しうござりませうな」「サア此様にお目出たう、宿這入の御祝儀に呼ばれるといふ事は、ほんに〜此頓吉、太鼓冥加に叶うたといふ物、なうお夏」「アイ、私も大勢の太夫様方を廻したれど、此様に内方へ來るといふは是が始、だん〜とお居黒めなされて、お二人の中に和子様も出来る様、ア、イヤ申し太夫様、釜の下がきつう燻るぞえ、そして何ぢややら無性に好い匂ひが。ドレ〜、どうでよう燒きはさんすまい、ソレ其火吹竹といふ物を、テモ堅い木ぢや、コレ頓吉様見やしやんせ」「ヤアこりや堅い筈ぢや、伽羅の節木ぢや。ハ、どうでも大名の宿這入は違うた物ぢや、極樂世界と喜見城、彼の唐土の阿房宮、三千世界に有るとあらゆる結構づくしを集めても、又と有るまい指向ひ、大方粥は金色の、菩薩の世話事床がため、御新宅の地形がため、明ヤア目出た〜の若松様よ、枝も榮える葉も茂る、お目出たいよのお目出たい、千秋萬歲〜萬々歳。」「ハ、コリヤ頓吉目出たい〜、皆知つてゐる通、此の高尾が突出しから逢ひかゝつて、毎晩々々通ひ詰める此の義綱、せまい廓の居續にとんと氣がつまり切り、どうぞ氣の替つた事がしたいと思ふ内、アノ錦戸刑部といふは、誠はおれが伯父なれど、今では家老同然、流血筋程有つて、顔に似合はぬ粹親仁、此様に家を建て、太夫とおれとたつた二人、百姓と云ふ者の眞似をして、大名事は忘れてしまへと、あれが勧めに此處へ引越し、

わいらをお客におれが料理、太夫も今朝から精出して、米洗うたり粥焼いたり、ヤモ大體面白
い事ぢやない。こんな事なら遠から百姓に成る物を、何の因果で大名に生れた事ぢや。マア第
一何を云付けても、ハア〜というて、何一つ無いといふ事のない其不自由さ、女子どもは女
子どもで、曲輪の張とは違うて、爰へこい、ハア帶解け、ハア、足上けい、ハアと、此様に思
ふ様に物事が行ては、モ世に生きてゐる甲斐はない。ヤほんに客人達も嘸退屈、ソレ太夫、家
渡りがゆが出来たら、お客方を奥の間へ、おりや膳立」と何事も、珍らし盛りたわいなく、
頓夏二人「そんなら奥でお祝ひ申さう」殿「サア〜こちへ」と打連れて、奥の座敷へ入りにける。
折から表賑ひて、唄彼船岡の〜、アレハサノ宿這入の門にゐて、アレハサノお目出たい、
ヤンラお目出たい、ヨオイヨオイヨオイ〜、ヨオイ〜アレハサノエ、ヨオイトコナ、アレハ
サノエ、コレハサノエ、〜、ヨイコノエイヤラナ、〜、もしも山の手の、天から大事の小娘が、
落ちたら喧嘩に成るまいか、ヨオイヨイトコナ、よい〜よいやな。聲も揃への染頭巾、坂道
を押す大八車、門口に引付けて、「御新宅の御祝儀に、一つしめましょ。ヨイ〜、モ一つせ
い、ヨイ〜、祝うて三度、ヨイ〜」滅多無性に目出たがる、顔は錦戸、殿「ヤア刑部か、
珍らしいしやれ姿、跡なは荒灘風之助、車に乗せたはアリヤ何ぢや」「今日殿様高尾様、御宿這

入の御壽おごんぎ、刑部様より御家見おんいへる、車に積みしは金子の箱、お心付こころづいたる御音物ごいんちつ、ソレ／＼内へ昇かき入れよ」はつと皆々立寄つて、數も限らぬ千兩箱、積み上げ／＼上板あけいたも、しわるばかりに並ならべ置く。義綱公は打詠うちながめ、「ム、粹すむな刑部が進物しんちつなら、何なにぞ面白い器物きぐつで有あると楽しんで居ゐたに、金子の箱とは、ム、マア見た所が面白うもない物、アリヤマア何の役やくに立つ物ぢや」と、不興きように刑部兩手を突き、「ハ御誕生有つてより外ほかを御存じなき御身おんみ、御不審は御尤、某がお勧め申し、今日只今百姓とお成りなさるれば、只今までとは違ひ、殿と高尾様とお二人にて、世帶方せたいかたをなさねばならぬ。其世帶と申すには、いかで叶はぬ物は金かね、掛屋方かけやかたへ申付け、アノ箱の中なかに千兩づつ、金高かねだかは三萬兩」「サア其様に云うても、其金とやらいふ物を、どうするのぢや合點がてんが行かぬ」荒あらイヤ其儀は荒灘あらなだめが申上げ奉らん、何事も御存じなき御殿様、今までは御家老方、お小姓こしやう近習じんしゆ用人じゆいんなど、あまた役人うけたまは承り、何から何まで致せども、是からは御自身ごじしんに世帶方をなされにやならぬ。先第一の立物たてものは米こめ、是も今日より米屋と申す者の方かたへ、太夫様でもお出でなされ、彼の米屋より五升でも一斗いっさうでも、かますといふ物に入れて持つて參る、夫を食めしに拵こしらへるには、薪まきと申す物を遣つかはにやならぬ。其薪屋にて和やはらか炭すみ一俵、是は早く火がおこり、女中方には調法てうはふな物、夫より味噌鹽醬油、現金げんきんでは扱あせはしいもの、そこで是を置替おきかへと申す物に

呑込ませ、先千兩箱一ツ二ツ、先々へ預けて置き、夫からお二人差向ひで、遊んでは食ひ、食ひては遊び、うかくとする内に、三十日といふ恐しい物が來ると、書出しと云ふ物を持つて、常は笑顔のよい親仁が、其日は急にこはい頬、其時にアレノ金箱、其儘では遣はれぬ。四文錢と云ふ物に取りかへて、さらりくと拂うてしまふ。又金がない時には、質といふ物を置かねばならぬ、是が又重寶な物、代物を持つて行くと、錢でも金でも二朱銀でも、望次第に換へておこす」「ア、まてく荒灘、大概是承知したが、今の質の所が大分面白い、アノ金を早う皆無にして、其質が早う仕て見たい。ガ又何にもなう成つたりや」「イヤ其時は此刑部が掛屋方へ申付け、何萬兩でも差上げる」「ハテナ、金といふ物は澤山に有る物ぢやなア、モウ遣ひやうは覺えたく。マア今云つた米や薪、そして味噌鹽とやらいふ物、荒灘ちよつと買うて見せい」「ハ、畏り奉る、ハ、白米壹斗薪四五把、和らが炭一俵、此直段が斯うと千兩ぐらゐるで有る。イザ家來中手分して、追付け買つて參らん」と、金箱かたけ立出づる、家來が締める草鞋の、はるかかゝの里へと出でて行く。すれ違ふたるまかい道、夫者と見える本田わけ、一つに合はす裏襟も、黒い顔付三浦屋才助、うろく見廻す門の口、「ちと物がお尋ね申したい、もし此處に冠者太郎義綱様といふお大名の店越しはござりませぬか。ヤア太夫か」高「オ、才助様ようお出

「ヤ義様も夫にござるか」義ホ、高尾が親方、何と申うて」「エ、何と申うてとは、お前はく減相なお方ぢや。此親方にも心得させず、飛遣手まで引連れて、大門へも斷無し、行方が知れぬ故、こちの内は上を下へとまぜかへす中に、去方から高尾を身請、云うて來ても肝心の玉が知れぬで方々へ、尋歩く此才助、サアく高尾早う來い。但しは高尾が身請金、今請取れば云分なし、あちらへ遣らうか金渡すか、サアくどうぢや」と高聲は、お定なるせりふなり。「コリヤ才助、わが云ふ事はとんと分からぬ、高尾はおれと宿這入したれば、どつこいも遣る事ならぬ」「サアそんなら身請なさるか」「ヤ其身請とは何の事ぢや」「身請といふは太夫が身の代」「サア其身の代とは」「エ、合點の悪い、コレ太夫を爰に置きたくば、金を此才助にお渡しなされと申す事」「ム、金か、初からさういへば濟む事を、ソレ其積んで有る金を、望次第に持つていね」と、仰に見附ける千兩箱、「ヤアくくく、世は末世に及んでも、有る處には有る物ぢやな。したがあんまり金過ぎて、直の云ひ出し様がない。エ、斯うつ、ソレヨ三百兩では、イヤヤあんまり安い、六百兩かい、六百兩ではまうけが少い。いつそ飛んで千兩か、エ、夫でどうやら安さうな。エ、コリヤどう云はう」と目もうろく、金に噎せるぞ道理なり。刑部聲かけ、「ヤイく才助とやら、何をうろく、誰有らう冠者太郎義綱公の御臺所に定る高尾

殿の身請、いか程と極めては世間の聞え、夫に積んだる千兩箱、其方が力次第、持たれるだけは持つて歸れ」と、云ふに才助猶恠り、夢では無いか夢にでも、こんな嬉しい有難い、うまい事が有る物か、たとへ肱は折れるとも、存分取らいで置くべきかと、薪の縄切これ幸、金箱手早に七つ八つ、しつかとくより肩腰入れ、上げてもくいつかなく、爰らが男の辛抱と、總身の力を肩に入れ、心は矢竹とはやれども、次第々々に精根盡き、息切れ目廻ひ汗だらく、「エ、扱もく此様な、因果な事が有る物か、寶の山へ入りながら、持つ事ならぬは金持に、ならぬといふ印か」と、涙ながらにこつてこて、取りへぐ箱のうらめしく、殘多けに漸と、一つ擔ける獨言、ひよろ／＼／＼してぞ立歸る。「ハ、、、、ても扱も弱いやつ、ア、是では又減らし様を王夫せずば成るまい。刑部も奥へ。太夫もおぢや」と、うつかりおんくわの御大將、金花咲く陸奥を、心がけたる錦戸が、「いざ御入」と打連れて、奥の間に入りにつけり。山道も、都なればや和らかに、育がなる風俗は、十七八の角額、貝田勘解由直勝が一子源之助、立派作の大小も、角菱立たぬのつとり顔、跡に付添ふほつとりは、伊達明衛が娘松島、夫婦といふは名ばかりの、まだ盛り見ぬ躑躅山、娼家來はかたへに残し、打連れ来る庵の戸口、「申し源之助様、道々も申す通り、殿様の情弱の御身持、國にござる唄様から、御異見申し上げ

よと竊ひそかの文、舅御様しゅうごさまへ申上まうけても聞入きこれなく、御諫言ごかんげんもなされぬは、どう思召おもほすお心やら、あんまり心ならぬ故、及ばずながら殿様へ、御異見ごいけんを申し上げうと思つても女の身、お前まへを楯たてに云ふ爲、最前さいぜんから申した事、よう覺えなされましたかえ」「ヤア、ムウ、イ、ヤ、先さきにから云いやつた事、餘り長あんなうて一つも覺えぬぞや。マウ大概たいがいな事なら、覺えさせずとよしにしやいなう」「エ、つんとマウ譯わけも無い事ばかり、コレ最前さいぜんから申した通り」「ア、待ちやく、むつかしい事ぢや故、宙ちゆうでは覺えぬ。コレたしなみ持つて居る」と、鼻紙袋はながみぶくろの石筆せきひつに、「サア今一遍云うて聞かしや」「サア殿様のお身持御放埒ごほうらつ」「ア、コレく其様に長ういふ事はない、筋すぢばかりで後はおれが胸むねに在る。マア、一殿様ひとつの事、さうしてから」「サア館やかたへもお歸りなく、晝夜ちゆうやを分かぬ御放埒ごほうらつ」「ム、よし御放埒ごほうらつの事、まう是でよいく、大概心覺えは書いて置いた、サアサア早う内へ往いなう」「エ、又何をおつしやるぞいなう、殿の御目にもかゝらぬ先さき、内へ歸つてよい物かいな」「ア、ほんにさうぢやなう」「コレ申し、必々行儀ぎやうぎやう、何なんにもお忘れなされな」と、伴ひ這入る門かどの口、「誰たそお取次頼とりつぎみましよ」と、音なふ聲に奥よりも、立出づる錦戸刑部、「ム、コレハく貝田の子息源之助、松島との夫婦連、扱めをは殿の御機嫌ごきげん伺ひ、お出での様子某が、後程宜しく披露ひろうせん」と、いへど答へもうつかりひよん。松島は氣の毒さ、「コレ源

之助様、刑部様へ御挨拶、ソレ早うおつしやりませ、申しく」と氣を揉めば、「ヤア挨拶とは何の事ぢや」「エ、ほんにしん氣な事では有るぞ、マア下へおすわりなされませ。ソレナ、行儀に兩手を疊へ著いて」「オ、吞込んだく」と、かしこまつて手をつかへ、「エ、アノ何とやら、エ、オ、それく思ひ出した」と懷より、以前の書付取出し打詠め、「エ、一殿様の事」刑「ム、殿様が何と致した」「エ、さうしてからアノ、御放埒の事」「何御放埒とは、シテくサ其跡は」「ム、何やらで有つたが、オ、ソレく、覺えぬく、あよく斯の如くなり。ナウ松島」と譯もなき、傍には獨り氣をもむ松島、錦戸刑部苦笑ひ、「ハ、、、、親に似ぬ發明人、何の事やら分らねど、御放埒といふからは、殿へ御諫言との事ならん。こりや松島の付智慧で有らう。其方の實父伊達明衡、國家老を鼻にかけ、申越したに違ひはない。此刑部は別腹故、家臣の列に加はれども、正しく義綱公の爲には現在の伯父、異見してよければ某が諫言する、いらざる女の忠義立、早歸りやれ」と傍若無人、横紙破りに松島も、何と詞もなき折から、荒くれ男の天窓付、仰反髪も鉞に、くより付けたる夏紅葉、遠慮會釋も門の口、ずつと這入つて上り口、「今日は爰に大金持の宿這入が有つて、榮耀榮華のほたえ次第、奢次第と聞いた故、どうで薪でもついた物では賣れまいと、思ひ付いたコレ此紅葉、賣りに來た此男、サア買うて貰ひましょ、

買うて下んせ」と、云ふも一曲有る頼付、錦戸きつと見、「ヤア己は先年義綱公に諫言して、用
 ひなきを憤り、白晝に國を立退きし熊川源五兵衛、ム、聞えた、浪人の糧に盡き、家々をゆすり
 商賣、古への主とも知らず、百姓町人と心得慮外千萬、錦戸刑部が前とも云はず、狂氣同然の
 尾籠者」と、きめ付くれどびくともせず、くつくと咲ひ出し、「ヤア、ぬかしたり腹の皮、三千
 世界に主君がなければ、怖い物のない此熊川、慮外と云はるゝ事はないぞ。三度諫めて身退く
 と古語に引きかへ、百度千度の諫言も、傍に付添ふ佞人ばらめが、さよいこさい云廻し、剩へ御
 前を遠慮、やゝ腹立に妻子を連れ、四年以來浪人住居、聞くまいと思ふ程、彌々聞える殿の放埒、
 其の元は傾城め故、コレ此紅葉は高尾の名物、コレ、眞此様に打切つて仕舞ふが主君の目覺しお
 家の爲、寵愛の女を手にかけてしと、殿が腹を立たれうが、とんほう反りしられうが、そこらは
 構はぬ源五兵衛、國に残る明衡定倉兩人が、知らず顔は知行が惜しさ、ヤモどいつもこいつも
 祿盗人めら、渴しても盗泉の水、儕等と一つに飲まぬ某、サア傾城めを此處へ出せ、留めだてす
 ると相伴に、此鉞で枯竹割、病の根を切る一療治」と、不忠の良藥熊川が、苦い利目ぞ手ひど
 けれ。「ヤア云はして置けば様々のたは言、早立歸れ」と引立つる、手先を掴んで引かづき、眞
 逆様にづでんだう。刑まう赦されぬ」と刀の鯉口、「ヤレ、暫く待たれよ刑部殿、熊川氏も早ま

られな」と、夙より戸口に貝田勘解由、二人が中に分入つて、「委細一々承る、熊川殿の忠節も適々、其方國元を出られてより、某竊に御諫言申せども、情なや御聞入れなく其の元は、國に残る明衡定倉、此貝田を忌み嫌ひ、御前を遠退けん爲奢を勧め込み、用金を主君に當てがひ、稻妻郷助といふ筋無き者を御傍に付置き、御情弱を勧むるは、兩人が心に一物有らん。某御傍を放れなば、いかなる珍事も出で來らん。兎角時節を見合さんと、御心に入る事のみ、御諫言も申さぬは、御傍を放れまい爲、心を盡せども、モ誰有つて片腕とする忠臣なく、様々心を痛める此時節、思はずも熊川殿、此處へ來られしは、某が身の大慶此上や有るべき。是より兩人心を合せ、佞人逆臣の奴原一々追ひ退けんは我方寸の内に有り。ハア、忝なや嬉しや」と、誠を表す忠義の詞、源五兵衛も納得し、「ム、忠義の爲とお言やれば、何國までも立て貫く熊川、定倉にもせよ明衡にもせよ、逆意と有れば國へ立越え、掴み殺すに何の手間隙、いで此のまよに國元へ」と、つと立ち上る性急者。「ア、イヤ、急いては却てお爲にならず、一先づ我家へお越しあれ、諸事の密談」「ア、イヤ、コレ、勘解由、そりや何事、向ふ見すのアノ熊川、こなたの屋敷へ連れ歸り、密談とは、此の刑部は吞込めぬ」「イヤサ此の貝田が御家の爲に、心を碎く仕上けは跡にて。ヤア、松島も諸共に、熊川殿を御供申せ、早く」と諫の

詞、心ならねど松島が、「イザ御案内、サア源之助様」「ム、まう往ぬのか、ヤレレ、ほつと退屈した。シタガあの強い人が出たので、どうやらちつと氣が晴れた、サア、往なう」と先に立つ。熊ム、然らば貴殿のお屋敷へ」「委細はあれで」と勘解由が式禮、熊川は皆打連れて出でて行く、跡に錦戸不思議の顔色、「コレサ勘解由、かねぐ某と心を合せ、義綱を空氣に仕込み、忠臣の奴原に、愛想つかさせ取つて押籠め、鶴喜代に跡目を願ひ、後見と成つて一家中を味方に附け、其上で鶴喜代を亡き者にせんと日頃の計略、大概に出来上つた所、忠義立するアノ熊川、ホ、ウ取込んだ我心は、殿の爲と賺しこみ、國に在る伊達泉兩人を片付けさせば、跡に氣ぶさいな者は無い。五十四郡は心の儘、只何事も我胸に、ちつとも氣遣あられな」と、惡事に固まる詞の下、宙を飛んで稻妻郷助、息をはかりに駈來り、斯と見るより兩手を著き、「ヤア御兩人共是に御入、殿様の御用有つてお館へ参りし所、何かは知らず國元より、早馬早駕籠上を下、何分殿様が御座なくてはと存じ、息を切つて立歸る」と、云ふもひいゝゝゝすたすた息。「ホヲ出かしたゝゝ、我々が御供は、人の目立つは御爲ならず、汝は館へ裏口より、片時も早く御供申せ、早くゝゝ」に稻妻が、はつとばかりに奥の方、折から歸る風之助、錦戸見るより、「コリヤ荒灘、日比云付け置きしは爰、外に供なき冠者太郎、跡より追付き道中に

て、人知れず討放せ。コリヤ必ずぬかるな」「合點」と風之助、道を早めて追うて行く。かゝる所へ貝田が若黨有村金助、色眞青に駈來り、「若旦那を御供し、歸る籠の岨傳ひ、羽色餘鳥に異なる山鳥、人も恐れず岩の上、元よりあどなき若旦那、手取にせんと成されしに、ぱつと立つたる跡を追ひ、山路へ追駈け御入有れど、かいくれに行方知れず、松島様の御歎き、過有つてはいかゞぞと、熊川殿にお頼み申し、數多の下部は手分して、尋ぬる隙に右の様子、御知らせ申さん爲、暮に及ばと氣遣はし、お旦那にも御出あれ」と、云ひ捨てと駈けり行く。刑部も悔り貝田勘解由、「心愚な我躬、古狼野千の所爲なるか、何にもせよ捨置かれず、刑部殿には義綱の、有無の音連相待たれよ」と、駈出す心もせき陽の、日影を追うてぞ駈けり行く。岩間谷陰咲揃ふ、花踏みちらす韋駄天走り、我子を尋ぬる氣はそぞろ、駈け行く坂中物こそ見ゆれと、立寄り見れば若黨金助、のたれ伏したる骸は血まぶれ、見るよりくわつと怒の眼、「ヤア主に忠無き卑怯者」と、死骸を谷へはつたと蹴込み、「必定猪狼の仕業ならん、たとへ天狗の所爲なりとも、大丈夫の一心に、何ぞ求め得ざるべき。峯を崩し水を穿つても、我子の敵微塵になさで置くべきか」と、眼血走り氣は半亂、駈け行くこなたの洞穴より、「ヤア暫く貝田勘解由、汝を待つ事やゝ久し、對面せん」と聲を掛け、立出づる其形相、律の髪を振亂し、身

は白狼はくろうの革衣かはころも、眉毛漏もくろれ来る眼まなこの光ひかり、「ム、扱けは家來けらいを害がいし、飴源せがれ之助を奪うばひしは汝しが仕業しわざよな。サア勦せんが生死しやうじ白狀はくじやうせよ」と、はつたと白眼にらめばにつこと笑わらひ、「ホ、竹たけの林はやしに住すむ虎こは、勢いきひ猛たけき物なれど、我子わかれの別わかを悲かなしみては、千里せんりに功有こうる足痿あしなえて、一步いっほを成なす事能できはずとや。さしもに勇ゆうなる貝田かいでんなれども、恩愛おんあいの道捨みちすててがたき、心こころを計はかつて一子いっしを取り、此山このさん中ちゆうへ釣り寄よせしは、大望たいきやうの片腕かたうでとも、頼たのまん爲ための我われはからひ。元某ひたちは常陸ひたちの大掾だいじやく國香くにかが末子はつし、常陸ひたち之助すけ國雄くにおと云いふ者、汝きみが主人しゆじん義綱よしづなは、陸奥りくお守秀衡しゆけいが嫡孫ちやくそん、我父わふち國香くにかは隣國りんこくにて、互あひに武威ぶゐを爭あらそひて、數度すうどの合戰がっせん軍慮ぐんりよを磨こき、軍いくさに勝利しやうりの時ときも有り、又は敵てきの方便へんぽうに乗り、味方みかた追おはるゝ折やみも有り、火牛くわぎうの角つのの爭あらそひ、天あめの成なりせる運命うんめいは、いかなる猛將まうしやう勇者ゆうしやなりとも、叶かなはぬ時節ときふしか闇々やみくと、秀衡しゆけいが謀はかりごとに思おもはぬ深入ふかいり、伏兵ふくへいども一度いちどに起おこつて亂戰らんせんに、父ちちを始め兄國光あにくにみつ、宗徒しゆんたの郎等らうどう一騎いっきも殘のこらず討死うちじと、聞きいたる時の我無念わがむねん、馳かせ付けて父ちちの仇あだ、弔軍さぶらひいくさせん物と、心こころははやれど幼稚ちゆうしの某それがし、頼たのみがたなき人心じんしん、恩顧おんこの家來けらいも皆散ちり、時節ときふし謀はかつて秀衡しゆけいを、一太刀ひとたちう恨うらみん其爲そのために、跡あとを晦くろまし國くにを立退たちのき、六十餘州よじゅうを遍歷へんれきし、深山幽谷しんせんいうくに身を凝こらし、習なひ覺おぼえし妖術まじつ幻術げんじゆつ、四疑しぎの孟德まうてくを惱なやませし、左慈さじが傳つたふる稀代きだいの妙術めうじゆつ、隠かくるゝ時は芥子けしにも入り、また現あらはせば天地ちんちに跨またがり、心こころの儘ままに身を變かへじ、神變しんぺん希代きだい心の儘まま、錦戸刑部きんこけいぶと心を合せ、國くにを奪うばはん汝きみが胸中きゆうちゆう、計はかりり知しつた

る我術にて、おびき寄せしも心を合せ、秀衡が末孫を、討つて亡父へ手向けん爲、勇猛智謀は汝に有り、我が妙術を添ふるならば、龍に翼を生ずる如し、大望成就疑ひなし」と、胸中見抜きし稀代の曲者、「ホ、適なる汝が詞、我が大望を見透かす上は、何をか包まん、錦戸が工に組するは、彼が權威を借らん爲、事成就せば打殺し、五十四郡を手に捌らば、一天四海も一擲、冠者太郎が家に傳はる亂髪といふ一刀、疾くより奪ひ身を放さず、刀紛失の次第情弱の身持、歸つて國へ通達すれば、館の騷の虚に乗つて、事を謀る方便は様々」「ハ、、、面白や」と猛惡に、悦ぶ國雄も勇立ち、「ホ、、、心地よき剛勇豪傑、返し與ふる源之助、子孫の榮請取られよ」と、引立て出づる源之助、親の工も夢現、別れ散つたる家來ども、追々尋ね見付ける人影、「ヤアお旦那是に、若旦那」と、立寄る下部を抜打に、右と左へ踏飛し、「怪しめられては事の破れ、只狼の難に遭ひしと云ひふらすも密事の血判、やがて再會々々」と、立別れたる深山路や、能はぬ望は童べに、花咲きまじる躑躅山、我家へこそは立歸る。

第 二

夜目にきらめく門構、磨き立てたる金物の、紋も羽を伸す竹の丸、冠者太郎義綱の上屋敷、用

心きび嚴しきしき拍ひやう子し木ぎの、音おとさへ澄すみみてしんくたり。色いろと酒さけとに現うつなき、身みは空うつ蟬せみのもぬけ殻がら、高尾たかおが肩かたに義綱公ぎこう、もつれもつるよ千鳥足ちどりあし、跡あとに付つき添そふ稻妻荒灘いなづまあらなだ、門外もんがわ近く立留たちどり、高尾たかお申し殿様どのさま、爰こゝがまうお屋敷やしき、現うつないお姿すがたでは、御家來中ごけらいちゆうの見る目めも氣きの毒どく、心こゝろをお付け遊あそばせ」といへどたわいもぶらく眠ねり。荒あらア、イヤ申し高尾様たかおさま、其様そのさまに氣きの毒どくがする事ことはない。縦たてへどう成なされうが、皆殿そのどのの御家來ごけらいばかり、怖こはい者は一人ひとりもない、ドレ御門ごもんを開ひらかせん」と、荒灘あらなだは門もんの戸こびら、割われるばかりに打ちたよき、「殿様どのさま只今ごきくわん御歸館ごきくわんなるぞ、御門ごもんを早く開ひらかれい」と、言へどひつそと靜しずまつて、答こたふる人もなかりける。荒灘あらなだはむくりを煮にやし、「コリヤヤイ是程これほどにわめても、返事へんじもせぬは寢入ねいりて居ゐるな。うぬらが役やくは何なんだと思おもふ、御門ごもんの開閉あけとどするばかりで、御扶持ごふちを食くらつて居ゐるではないか、其殿そのどののお歸館きくわんに、たわいもない寢ねとほけめ等ら、ど性根しやうこん付けずば荒灘あらなだが、門打碎もんうちくだいて御供みともせうか、ごくだうめら」とどつてう聲こゑ、俄さかに騒さわぐ御門内ごもんない、さつと一度いちどに高提灯たかぢやうちん、はせ違ちがふ人音足音ひとおとあしおと、思おもひがけなく表おもては恠びつり、門内もんないより聲こゑ高く、「御門番ごもんはんは伊達治郎だてぢらう明衡あきつゑ、子細しさい有あつて相勤あひつゐむる所に、理不盡りふじんに門もんを開ひらけななどは何者なにものなるぞ、眞直まっすぐに名なを名乗なをのりれ」と、詞ことばに仰天荒灘ぎやうてんあらなだが、暴風はふてに逢あひし心地こゝろにて、皆々みな答こたへもなかりけり。「ム、聞きえた、京童きやうどうのされ深く、田舎武士いなかぶしとて騁なぶるよな。急度詮議きつごせんぎもすべきなれど、大事だいじの評議最中ひやうぎさいちゆう、其儘そのまゝに打捨うちす

て置く。ヤア／＼者ども、御門を厳しく相守れ」と、聲諸共に締める戸の、貫木入れたか詞の錠、稻妻は氣をいたため、「コレ／＼荒灘、何にもせよ我君を、館へ御入れ申さずば、事の様子が氣遣ひな、裏門から御供せん。イザ御出」と御手を取る。高尾も共に氣もそどろ、裾もほと／＼踏みかへす、裏の御門へ急ぎ行く。廻れば道も遠目から、星をあざむく高提灯、晝かとはかり人々は、只うつとりと詠めるる。郷助は詮方なさ、御門の扉にひそ／＼聲、「此御門はどなたのお固め、義綱公御歸館なれども、表門は明衡殿御固め、殿御入り叶はず、何卒密に此門より御入り有る様頼入る」と、聲より早く高堀より、ずつと見越すは名も高き、和泉小治郎定倉、「ヤア義綱公の御歸館とは心得ず、此定倉が主君と申す、冠者太郎義綱公は、五十四郡の御主、西に津島の冠者、東には伊達冠者、靜謐の御代には國の固め、戰場に出馬の時は、百萬騎の大將たり。夫に何ぞや女童を引連れて、ム、コリヤ我君を放埒なりと世間へ流布させん爲、悪人共のはからひよな。錦戸貝田が知らせて、お家の重寶亂髪の刀紛失と追々知らせ、必定逆意の者共が、騒に紛れ我君の、御身の程も覺束なし、君は館に有るとも無きとも、知れざるも又佞人原の、心を探る一方便と、御門を固め此通り、見れば足弱を連れし旅人と見ゆる、門前にうろついて、人に見咎められぬ様、早く立去れ／＼」と、子細有りけな定倉が、詞と共に門内

も、ひつそとしづまり音もなし。人々案に相違して、心をいたむる其中に、寐ほれ聲なる義綱公、「御家老衆の例の堅み、大切がる此門も、島原の大門程には我等嬉しう思はぬく。イヤ又出口は和らかみが格別、されば廓中先生達の御託宣に、都島原出口の柳、かそやれく此柳、サツサかそやれ此柳なぞと、やつた所はたまらぬく」と、現たわいも無かりけり。隙を窺ひ荒灘が、義綱目がけ抜く刀、目早く稻妻引すりのけ、「ハテ心得ぬ風之助、大恩の御主君を、討奉る極悪人、コリヤうぬ誰ぞに頼まれたな」「オ、知れた事頼まれたが、それを己にいふものか、打殺した跡でいうて聞かさう。先うぬから」と切込む刀、まつかせ合點と抜き合せ、打合ひ打合ふ白刃と白刃、電光石火稻妻が、手練に刀打落され、逆行く荒灘後袈裟、二つに成つて死してけり。「ホ、通手柄」と小治郎定倉、「當座の褒美」と投げこす一通、「委細は夫に、早行け」と、詞は何かしら刃の血しほ、「一先爰を高尾様」「アイくくく」とかいしよけに、こづま引上げ我夫の、御手を引くもなまめける、姿の盛り花紅葉、我にたわいも現なき、君を伴ふ稻妻が、忠義は今に 三重。

第三

謀計は一旦の利潤、神明町に一構は、貝田勘解由直勝が屋敷、義綱公の館の内、分けて目に立つ花麗の作り、手を盡したる奥の間は、浮べる雲の金襴、龍に翼の出頭は、誰並ぶべくも見えざりけり。ちよつと掃くのも四五人が、草臥れる程廣い間に、狭い女氣陰の間の、奉公箒持ちながら、「コレお綱、此様に朝から晩まで闇がしいお屋敷が、廣い京にも有りやせまい。爰から近い北野様へ、一寸と参る事さへ叶はぬ」「ソレイノ、忙しい中へ心も無う、錦戸刑部様が三日に上げずお出なされ、旦那様と園の内、何やら二人さし向ひ、人にお隠しなさるゝは、どうでろくな事では有るまい」「オ、ろくでないと云ふなら、お館様はうかくと、傾城を買過し、此間から行方が知れず、お大名の駈落でも、鎧長刀の持人は無し、お供の衆は有るまいし、マア危ない事ぢやないかいなう」「ホンニソレ、あぶない次手にこちの若旦那、船岡山の歸りがけ、松島様におはぐれなされ、蓮臺野の片傍で、狼に取りまかれてござつたを、漸連れましてお歸りなされた。しかし狼で仕合、アノマ美しい若旦那、狐などが取巻いたら、跡が疵物に成るナウおむつ」「サレバイノ、どこに思ひ入れが有るか、熊川とやら云ふ怖い顔な人に、狐が付いてそぞろ言、夫を祈り鎮めると、狸の様な山伏が、憎てらしい高慢顔、狐やら狸やら、狼やらであへかへす、狼より恐しい旦那様のお目玉を、貰はぬ様」と段々に、掃除しながら次へ行

く。襖明けると摺足し、脇目もふらず源之助、屋敷の内もあぶくくと、苦は色かへぬ松島が、跡に付添ひ立出づれば、通隠れも無い大名、太郎冠者在るかやいく、来たかく、コレお前にと言ふのぢやわいなう。エ、覺の悪い人、マア一度初手から仕直さう、サアく早う立ちやいなう」然「アイく、そんならあとを致しませう。夕お前が行方なうお成りなされた其時に、はつと思うた悲しさと、お歸りなされた嬉しさと、何やら彼やらで持病の癪、ちつとの間お待ちなされ、お氣が盡きたらお菓子でも」「イヤく欲しうない構やんな。きつう癪か痛むなら、灸をするてやらうかや、熱いが辛抱しやるか」と、云ふ顔つくくく打詠め、「嬉しい今の其お詞、夫婦と思し召せばこそ、愚しいお心にも、たと案じて下さんす、思ひ出すも味氣ない、お爺様と爺様が、云約束の無い先から、私が心に極めた殿御、女冥加に叶うたのぢやと、思ふ内早睦び月、祝言をして程もなう、健忘とやら云ふ病、神や佛のお力で、御本復は遊ばしても、御一門のお出會に、つまらぬ事をおつしやる度、おいとしいやら悲しいやら、此後とても侮られ、住むかひも無いお身の上、思ひやられて悲しい」と、悔涙の折からに、奥よりしづく出来るは、明衡が一子千賀之助、立派に出立つ旅装束、松島見るより、「是はく直様お立ち遊ばすか、此頃何かに取紛れ、問はせの文も認めず、國では兄弟同然に、中の好かつた文字摺様、

お前がお迎へ遊ばせば、私が爲には大事の姫様、どなた様へもお前から「いかにもく、誰々へも宜きに傳へん、源之助殿にも御堅固に」と、いへどうつかり氣の毒を、紛らす松島勝手口、連れて見送り出でて行く。「サア是からおれが一人遊び、鼓も太鼓も爰に在る」と、習うた事は奇特にも、鼓取上げ聲張り上げ、「謠抑是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽霊なり。詞ハア、わしが好の強い伯父様が出てござつた、コリヤ面白いく。謠打物業にて叶ふまじと、數珠さらさらと押し揉んで」跡より出づる奇妙院、「謠いかなる天魔鬼神なりとも」祈りふせんず眼付きよろく、目して熊川が、何を聞いてか高笑ひ、熊ハ、コリヤをかしいく、日頃堅い顔してゐる、六條の左近殿が、聖護院のお辰女郎を嫁に取る、コリヤ取持に行かすば成るまい、明先盃は三々九度、祝儀も濟んで床の内、しめてからみし藤の森、松の千年と契りしを、小女郎が聞いて格氣の焼餅、一つ參れ兵衛殿、ま一つ參れ兵衛殿「詞ヤア伯父様、其餅くたか、エ、汚な」「明北野を過ぎて柏野や、思ひ内野に有ればこそ、つめつた跡の紫野、後は互に睦言の、未來を契る蓮臺野、小褌引上げ引きしめて、裾はひらく平野の宮へ、思ひなんく七野の社、縁を切れとはエ、胴欲ぢやナ。わしや何ほでも放りやせぬ、殺して置いて行かしやんせ」と、泣いつ笑ひつ現なく、とんと倒れて高髯、奇妙院は一心不亂、祈れど驗有らざれば、源之助は精

盡かし、「エ、鈍な山伏ぢや、二人面白う遊ぶのに、己が邪魔を仕居るので、伯父様もつい寢入つた。サア／＼とつとと歸れく」「イ、ヤ歸るまい、貝田殿の頼によつて、此病人を本性にする。若輩者の知る事ならず、黙つてをろ」と睨め付ける。「ワアイ病人を直すはお醫者様ぢやはい、わいらがそんな事したてよ、一つも利く事ぢやない。邪魔に成る、早う歸れ」「シヤ小癩なる素丁稚め、某が術を以て、空飛ぶ鳥も祈り落す、世事に分らぬ大馬鹿に、云ひ聞かすには及ばねども、刑部殿の頼により、義綱の曲輪通ひ、伽羅の下駄に呪咀の文を書き、履かせたる故にこそ、眞心蕩けて本性なし。まつた是を直さんには、懷中したる祕書の一巻、此中に一つの良藥、是を吞ませば義綱が、元の通りに正しく成る。かく萬事に互る某、魍魎魍魎を退けんは、掌をもつて大地を打つよりいと易し。イデ／＼驗を見せん」とて、又いら高を押しもめば、源之助は撥押取り、「謠今の蛇身を祈る上は、何の恨かあり明の、鐘こそ、すは／＼動くぞ祈れたとたど、引くや手々に千手の陀羅尼、不動の慈救の偈、明王の火焰の、黒煙を立てよぞ祈りける」祈りののれ源五兵衛、「謠恐しや幣帛に、三十番神まし／＼て、魍魎鬼神は穢はしや。出でよ出でよと責め給ふぞや、詞アラ腹立ちや苦しや」と、奇妙院が首筋掴み、座敷へどうど投付けて、覆ひ重る肥滿のからだ、大山を負うたる如く、指を屈めん様もなく、苦しむ内に聲高く、

「謠尋ねてもく、此上嵐の雲に在りて、龍女は南方に飛去り行けば、龍神は猿澤の、池の青波蹴立てく、て」めつたむしやうに踏付けられ、目口を張つて奇妙院、其儘息は絶えにけり。熊「サアく、是からはおれが居間、其山伏を人形にして、遊ばうでは有るまいか」と、云ふ内よりも死骸をさし上げ、「唄中のく、小法師は、なぜ背が低いぞ、まつかう高いはく、」氣の抜けたのと氣違と、誰に心もおくの間の、襖押明け入りにけり。斯くと様子もしろ書院、入来る渡會銀兵衛、大場道益伴ひて、座敷へ直れば、夫と案内に貝田勘解由、「ホ、渡會殿御大儀千萬、シテ彼の一品は調ひましたかな」「ハアいかにもく、委細とつくと此道益老に相頼む、事成就の後は新地千石、證人は此銀兵衛、則證文も渡し置く。ナニ道益老、最前お頼み申した通り、調合の彼毒藥、勘解由殿へお渡し有れ」と、差圖に道益近く摺寄り、「お頼みの彼毒藥は、我等が家に傳はる祕法、醫の道は仁術にて、人の命を斷つ事は、醫家には固き禁なれども、國の爲との御事故、調合は致せども、先何人に此藥御用ひなさるや、承つて上の事」と、いぶかる顔色、貝ホ尤の尋、國の爲家の爲、其毒藥を用ゐるは、若殿鶴喜代君「大エ、とは又何故」貝オ、錦戸刑部殿に此國家を押領させ、我も諸共に國郡の主と成り、榮耀榮花をせん計略、スリヤ銘々が國の爲さ」大「ナニ鶴喜代君に毒藥とは、お國を亂さん國賊ども、長袖なれど

も忠義は忘れぬ大場道益、知行にほだされ非義非道に組せんや。穢はしき奴原と、暫時も同席勿體なや」と、つツ立上るを銀兵衛が、立ち塞がつて、「どこへく、大事を聞かせ歸さうや」と、留めてもいつかな一徹老人、貝田が拔打後けさ、すぐに留めの一ふぐり、具ア、時代に合はぬ忠義立、たとへ得心したとても、打放さでは後日の難」と、懷中さがし取出す包、「コレサ銀兵衛、此一包は貴殿に渡す、豫てしめし合せし通り、ソレ早くく」「ハア委細承知仕る、追付け吉左右お知らせ」と、館をさして歸り行く。後に勘解由は血押拭ひ、死骸片手に蹴上ける疊、さあらぬ體に傍なる、臺子の釜へ打込む毒藥、元の如くに蓋取繕ひ、「ナニ松島、それにお居やるか、松島々々」と呼ぶ聲に、あいと返事も合の間の、襖押明け手を突けば、「ホ、嫁、そちや先程よりそこに居るか、何ぞ様子を聞いたか見たか」「イ、エ何にも」「ム、知らぬぢやまで、イヤナニ松島、今朝より何かと用事繁く、ほつとりと退屈した。幸の釜のたぎり、そちが手前で薄茶一服、立てよくりやれ」と底意有る、舅の詞松島が、立寄る振の紅の、朱を奪ふや紫の、服紗さばきもしをらしく、立つる茶釜の泡よりも、先へ消え行く命とは、心も付かず氣も付かず、行儀正しく差出す、茶碗取上げ貝田勘解由、とつくと詠め、「ム、色も變ぜず、ちつとも怪しき體もなきは、ハテ奇妙の祕法、ハア、嬉しや、此毒藥を膳部に加へ進めな

ば、鶴喜代は即時に落命、ハ、ハ、心地よや」と高笑、聞いて悔り松島が、心は千々に浮島や、水に漂ふ思ひなり。「コリヤ松島、とてもものに此薄茶、其方そこに獨服せば」「エ、」「イヤサ驚く事はない、其方が父伊達明衡は義綱の一族、忠義立する老惚め、鶴喜代を毒害しても、刑部殿へ國の政道仰付けられなき内に、事露顯せば大望の妨、現在明衡が娘の其方、ヤモ生けて置いては夜が寝られぬ。様子聞かうが聞くまいが、どうで助けぬそちが命、其毒薬を試みて、死んで見せるが舅へ孝行」サア吞め、ぐらへと舅の詞、思ひがけなき松島は、暫し途方に暮れけるが、漸に顔を上げ、「明衡が娘の私、若君様への毒害を、とよ様へ洩さうかと、思召してのお疑ひ、道理とはさらく存じませねど、姫御ぜの身は生れてより、三界に家無しとやら、夫を神とも佛とも、大事にするが世の教へ、其夫の父上様、眞實本の爺様より、御大切に思ふ物、たとへどうした事にもせよ、お身の御難に成る事を、何の人に洩さうぞ。未練に命惜しいとも、微塵思ひはせぬけれど、心に懸かるは我夫の、愚かしいお心故、女夫といふは名ばかりに、つひに一度の添寢さへ、馴染む程猶頑はない、氣にも私を女房ぢやと、思うてござるがおいとしい、離れともない死にともない。何々の誓文で、人には言はぬ申しませぬ、命を助けて給はれ」と、口説いつ泣いつ伏しをがみ、伏拜む手に露雫、つ

たふ涙の瀧津浪、岩に堰かると風情なり。かよる所へ渡會銀兵衛、色眞青に駈來れば、勘解由きつと見、「ヤア合點の行かぬ貴殿の顔色、首尾よく毒害仕おほせしか、ア、心元なし、何とく」「さればく、直様館へ馳付き膳番にしめし合せ、膳部に残らず毒を入れ、サア仕濟せしと思ふ所に、イヤマウよい事には、寸善尺魔、若殿の御手遊、枝珊瑚樹の鉢植が、微塵に割れしは心得ずと、乳母政岡あやしめば、カノ強力者の節之助、正しく毒に紛ひなし、其頼人を白狀せよと、膳番川崎軍八が、首筋攔んで手詰の場所、遺老功の刑部殿、急きにせいたる風情にて、軍八を眞二つ、傍に居並ぶ近習小姓、姫茶道に至るまで、十人ばかり卽座に手討、白狀すべき手筋も切れ、只今評議眞最中、いかど計らひ申さんや」と、青息吐息訴ふれば、さしもの貝田も溜息つき、「エ、十が九つ仕おほせしに、残念々々さりながら、す敏き刑部の計ひにて、詮議の根を斷つたるは、適の働、しかし政岡松が枝なんど、鶴喜代が傍を離れねば、事を計るに便なし。ガ其毒藥を見出せしは、外に逆意の者有りと思はせん計らひなりと、返つて彼等に難題を云ひかけ、遠ざける謀計は、刑部と兩人謀らはれよ。暫時も猶豫なりがたし、早くく」に渡會は、復引かへし駈けり行く。具嫁々、コリヤ松島、斯く仕おほせねば猶の事、彌命は助けられぬ、覺悟して早く吞め」「アイ」「サア吞め」「アイ」「くらはぬか死女郎、サ

アサア／＼」と追廻され、悲しさつらさ一世の瀬戸際、襖ぐわらりと源之助、拔手も見せず松島が、肩先ずつぱと切り下ぐる、ウンとばかりにかつぱと伏す。血刀逆手に取直し、ぐつと突込む弓手の肋、日比に變る利發の覺悟、強氣の勘解由も悔り仰天、手負は苦しき顔振上げ、源「日比愚鈍の私がかゝる有様、父上の御不審は御尤、錦戸殿としめし合せ、勿體なくも主君を失ひ、國を奪はん御企も、子孫を榮華に有らせん爲、其きさしを鎮めん爲、いつぞやの大病を、是幸と作り阿呆、現なき身の行作も、主人を掠める冥罰は、盼に忽ち報いしと、先非を悔いて本心に、お成りなさるゝ事もやと、心を付くれど此比は、彌募る惡事の企、父は子の爲に隠し、子は父の爲に隠すと、古語に引きかへ親と子の、心々に隠しあふ、不忠不義の御心、諫言せんにも情なや、明衡が娘松島、某が妻とすれば、女に引かされ大望の、妨なすかと思さんかと、不便ながらも此のごとく、手に掛けたるは女房の、縁に迷はぬ心の潔白、仕込みに仕込みし御企、思ふ圖の外れしは、天道、誠を照し給ふ、是目前の徴ぞや。近き手本は舟岡にて、鳥を取らんと眼前の、欲に迷ひて山深く、難に逢うたるまつ其の如く、國郡の欲に耽り、我身を忘れ深入し、終には御身を亡し給はん、淺間しや、父の惡事の根本は、私と云ふ子故の闇、其迷ひの根葉を斷つ、我が生害は先祖代々、傳はる貝田の家の苗字、汚さじ物と一心

に、思ひ込んだる孝の道、心の迷ひをふつつと切り、惡事を思ひ留つてたべ」と、孝と忠義と二つ三つ、よわり行く身の松島が、「扱はさうしたお心か、さうとは知らず今までも、御病氣故の現言、どうぞ本復有る様と、烏の鳴かぬ日は有れど、泣いて祈らぬ神様や、佛様まで御苦勞を、懸けぬ願ひもなかりしに、今の立派なお詞を、悦ぶ甲斐も情ない、コレ此のお姿は何事ぞ。此世の縁は薄く」とも、未來はやつぱり夫婦ぞや」と、痛手も厭はず縄の付き、いたはる息も絶えぐに、頼すくなき其風情、強惡不敵の貝田勘解由、「ハ、ハ、ハ、ハテぼざいたり不孝者、子が死なうが親が死なうが、思ひ込んだる心の大望、いつかなく翻さぬ。親に逆らふ天罰にて、くたばるは不孝の罰、思ひの儘に苦痛をひろけ」と、二人をはつたと踏飛し、見返りもせず入りにける。様子とつくと物陰より、ぬつと出でたる源五兵衛、「貝田が胸中合點行かず、事を謀らん其爲に、狂氣の體に何も角も、聞抜いたれば遅れぬ勘解由、イデー一擲」と駈行く勢ひ、「ヤア、待つた源五兵衛殿」と、苦しき骸取縄り、「忠義に凝つたる貴殿とは、知つたる故に法印が、工の次第あど打つて、白狀させしも我父の、百分が一の罪亡し、我も少しの忠義ぞや。主に叛く父勘解由、果は刃の錆屑と、成り給はんとは思へども、眼前親の憂き目をば、何と見て居られうぞ。相果つるとも魂は、四十九日が其間、此土を去らぬと聞くな

れば、死しても見ゆる我悲しみ、せめて暫しが内なりとも、父の命を延べてたべ。コレ、今は、
の際の願ぞや、コレ手を合す源五殿、お情お慈悲」と身を投伏し、歎けば共に松島が、合す兩
手も弱々と、今を限りの二人が體、孝心貞女の節義には、さしもに荒き熊川も、目を數叩き居
たりしが、「佞惡邪智の貝田が躬に、斯くも忠孝揃ひたる、適健氣の若者よな。親は子故に迷
ひもせで、子は親故に迷ひしよな。赦しがたき勘解由なれども、汝が孝心厚きに免じ、けふの
様子は何事も、知らず覺えぬ」氣違ひの、目にはこぼさぬ一雫。「ハア、ハ、、、」有難涙
末期の水、引取る息も一時に、哀はかなき最期なり。ほろりとこぼす勇者の涙、しをるゝ熊川
庭先へ、貝田が下知にて數多の家來、ばら／＼と追取卷き、「ヤア體氣ちがひの源五兵衛、
遁すな、行らじ」と呼はつたり。「ム、ハ、、、常の力に百倍増、氣違力の源五兵衛、成ら
ば手柄に留めて見よ」と、庭へひらりと右左「挿つた」と掛るを引寄せ、ばら／＼と人礫、
強力手練の働きに、「コリヤ叶はぬ」と皆ちり／＼、思ひがけなき後より、頭目當に打付くる、
釜の熱湯毒氣に咽び、思はず尻居にとつかと伏す、透へ切込む貝田が刀、請けたる強力手水鉢、
微塵に成さんと振上ぐる。遺の貝田氣を吞まれ、遡入る跡へ又むら／＼、出合ふ大勢打付くる、
石に打たれて人の鮎、我身もどうとふし／＼に、沁込む毒氣に眼も眩み、勇氣も碎け無念の齒

がみ、「エ、口惜しや残念や、やみく〜と毒藥に、命を果すか奇怪や。此上は何千萬、日本國が寄せくるとも、死物狂ひのあばれ死、敵の屋敷に我屍、いつかな殘さぬ人種の、有らん限り」と氣を固め、踏出す足もたぢく〜、弱る兩足踏みしめく、支ゆる奴原張退け蹴殺し踏殺し、人無き原を行くごとく、萬夫不當の豪傑も、運つきの輪や熊川が、武勇の程こそ 三重ゆとしけれ。

第 四

姬氏國と書きし寶誌こそ、四百餘州の粹ならん。何國は有れど取分けて、都の水で磨き上げ、娘盛の品者が、前垂たすき掛けまくも、かみ形さへ手品さへ、和らかさうな豆腐屋の、内を手傳ふ小息子が、水の垂るのを焼立てる、おかべ一重の隣には、何する人としら浪か、しかとは見えぬ男振、されども此人、晝をば何と烏羽玉の、夜ならで目覺め給はぬは、いと不審多きすぎはひなり。中間とも侍とも、わからぬ腰付せいひつ合羽、あたりうそく立留り、「浮世渡平は此宅な、在宿ならば御意得たし」「ア、誰ぢや喧ましい、用が有るなら明朝ござれ。ム、夕べの義理を取りに來たのか、晩には是非とも行く程に、其時に一所に濟す」「イヤ〜左様の用事でなし、

自他共に御意得たし」「是非逢ふ氣か、そんなら其戸をぐつと押した、ア、コレく靜かに仕やうぞ、こほれ物がごんすぞや。アリヤこそ搜瓶引くり覆した、龐相な人」とぬつと出す、顔はをかしく惡光り、素人の焼いた樂燒の、中にぎろ付く目を擦りく、「エ門兵衛様、扱懐じい降でござります。そしてマア何ぞ用でもござりますか」「オ、サく密々の用事も有れば、内へ這入つて其様子」「イエく内は雨がだゝ抜け、外の方が増しでござんす」「然らば是で申付けん、主人錦戸刑部殿、其方へお頼みなされたきは餘の儀でもない、隣の豆腐屋は、傾城高尾が親りなれば、冠者太郎諸共に、尋來たらんは必定、其時には折を窺ひ、人知れず二人共に刺殺し捨てられよ、此儀首尾よう仕おほせなば、某が吹舉して、侍に取立てる。斯様の事を申付けるも、先日屋敷で博の節、二三度の出會に、汝が魂見抜きし故、偏に奉公勵まれよ」「畏りました。スリヤ鄰の豆腐屋は」「オ、高尾が親里、若しも尋ねて來まい物でもなし、來た時には」「ハテ氣遣ひさんすな、貧乏動きもさせませぬ」「ハテ扱小氣味のよい男、然らば随分手ぬかり無う、萬端貴殿を頼入る、近日ゆるく御意得ん」と、詞は適萬石取、腰に二腰さしこなす、銀拵へも胡散なる、なまり散らしてかへりける。渡ようお出でなされました、コレ屋敷によいのが出來たら、かならず知らして貰ひましょぞえ。沙汰無しにしよまいぞえ。アしかしあい

つも錢無しぢや、ちつと負けると小言ばかり、エ、あつたら夢を覺された、ま一寢入見知らそ」と、入るよりはやく高敷、著のみ著の儘氣散じなり。「サアく申し重三様、大分仕事のほかが往た、ちつと休んでくださんせ」「イエくお構なされますな、女氣の無い私が内、湯ぢやの茶ぢやのと親子とも、毎度お世話に成りまする、コリヤそのお禮でござります。七兵衛殿は病氣で、宿へさがつてゐられるけな、その間は御遠慮無う、お遣ひなされて下さりませ。まだよつ程此豆腐、手序にみな片付けませう」そんならさうして下さんせ、私も串を刺して仕舞ほ。イヤ申し重三様、斯うしてお前とかう並んで、此様に精出すも、世帯の稽古して見ると、ほんに嬉しうござんする。初めて見初めた其時に、いとしらしいと思うたが、癢を覺えた始にて、廻らぬ筆の跡や先、譯の無いのが縁の端、夜すが求めて寐てそして、寐る度毎に可愛さの、十寸鏡取る其隙も、寐た間も忘れた事は無い」「ア、コレく豆腐を其様に振廻すと、私が身内は眞白に、人の白あへが出来まする。ホンニ嬉しいお志、ちつとも仇には存じませぬ。元私は小さい時、餘所へ養子に参りましたが、先が皆死果てと、此頃親仁を尋ねて参り、一月餘り京都の住居、近所に馴染と云ふは無し。南無三豆腐を眞黒にしたの、マウ親身といふは親仁ばかり、御存じの通りのあゝ云ふ氣性、ヤ申しお幾様え、此上ながらお頼申します」「あれまだ

あんな固くろしい、他人の様な事ばかり、お前の心に懸子が在る」「かけごも何にもござりませぬ、ほんにかはゆうござりまする」「其ござりまするがわたしやいや」「そんなら可愛女房ども、私が心は此焼豆腐、たとへ火の中水の底」「そりやほんぐでござんすか。幸酒も爰に有る、改めて内祝言、必ず嘘を云はしやんすな」「何の嘘を誰がいほ」「そんならほんまに此方の人」「女房ども」「オ、嬉しや」と抱き付き、締めからみたる若藤や、若紫の若女夫、面白盛花盛重「イヤ晝日中このやうに、引ついても居られまい、お袋様は今朝から南禪寺の方丈様へ、ア雨もどうやら止みさうな、幸豆腐も出来て有る、お迎ひがてら往て来う」と、あちに世話をば焼豆腐、提けていそぐ出でて行く。日影はつらく忍ぶ身は、薄におぢて菅の蓑、御笠と申せみさむらひ、賤の姿にしよんほりと、高尾を先に義綱は、とある小陰に立休らひ、「ヤコレ高尾、冠者太郎義綱ともいはるゝ身が、鳥おどしの様な形をして、そなたと斯うして道行は、此頃で無い大當、今日の趣向を皆に見せたい、呼んでこい」「アイく、イヤ申し殿様、モウ爰が私が内、サアくお入り遊ばしませ。又此郷助殿は何してぞ」と、云ひつゝ寄つて蓑笠を、ぬがせ申せば義綱公、すつと通つて「誰ぞ居ぬかく、爰へ来て足洗へ。つひは仕て見ぬ世話事で、今日は大分草臥れた。サアく早う」も夢現、悔りしながら娘の幾、手盥に汲む豆腐の

湯、お足に障る和らかな、手先にふつと、「ム、穢い内に似合はぬ奇麗な娘、一夜の情をかけてくれやう。悦べ、今の褒美に何をがな、オ、幸々、今まで履いたツレ其下駄、あたゝまりの有るのを使はず。是が妹脊の固めの記、後日に否と云はさぬ様に、太鼓どもが常にいふ、下駄をしつかり預けたぞ。コリヤ誰か有る、案内せい」と、上座へ直るも千鳥足。門より高尾が、「コレ、妹、久しぶりの姉が顔、見忘れはしやらぬか」「何のマア忘れませう、姉様よう来て下さんした。此間からお前の噂、とやかう聞いて案じたが、お前の事を言出すと、鼻様の不機嫌、モウ何處にどうして居やんすぞと、案じぬ日はござんせぬが、鼻様はさつきにから、南禪寺の方丈様へ、往かしやんして留主なれば、お戻り次第よいやうに、私がいはう。必ず案じさしやんすなえ」「オ、よう云うてたもつた。曲輪へ往て逢はぬ中、テモマア大人しう成りやつたの。夫なら鼻様はお留主かや、イヤコレ此お方は大事のお身、跡からお供も来る程に、ちつとの間なりと奥の間で、御休息さしましたい」と、どうやら譯も有る體を、見て居るお幾は手をつかへ、「見苦しけれど奥の間へ、イヤ御入り」とすゝめられ、「オ、行かう、サア高尾もおぢや」と打連れて、一間の内へ入り給ふ。道におくれて稻妻が、息急き尋ぬる黄昏時、南禪寺の門前は、爰かと人にとふ屋の、門をそこへ行迷ふ。戻りかよりし主のお澤、「ア、イヤ申し、卒

爾ながら物問ひませう」と見合す顔、「エ、お前は神浪山左衛門様ではござりませぬか」「ヤコ
な様はお澤様、テモマア久しぶりでお達者な顔」「お前も御無事でお嬉しや、サアくマアマ
ア此方へ」と我家の内、山左衛門取りあへず、「ヤナニお澤殿、思ひ出せば十六年以前、若氣
の至りと女に馴染み、因果と腰胎、生れ落すと女は相果て」還「アいか様ナア、若いお人の萎た
らと、乳呑子抱へうろくさつしやる氣の毒さ。しかも辰の年辰の月、辰の日辰の刻の、ほん
に珍らしい誕生、幸ひ此方に乳も有り、姉と一所に吞ます内、斷も無うお前は家出、滅相な
人ぢやと思つたが、死んだ佛の云はしやるには、餘所の子を世話にするも、一方ならぬ他生の
縁、必ず麓末に召さるなと、夫婦して育てる内、其愛らしさ可愛らしさ、何時ともなしに此方
の娘」「成程其節我ら旅より歸り、お尋ね申せど行方知れず。不思議な事で今日といふ今日、廻り
逢うたも古主の御恩、シテ其娘は何と致したな」還「サアお腹一つ痛せず、疱瘡麻疹も輕う仕廻
ひ、自慢ぢや無いが、此界限に、ま一人と無いよい娘、シテマアお前は何故に」「ア、イヤ拙者
只今仕官の身、稻妻郷助と名を改め、お主の供して此邊に、傾城高尾の親里尋ね」還「何とおつ
しやります、傾城高尾の親里を尋ねてか」「イカニモく」「オ、其高尾と云ふはわしが娘のお
種ぢやはいの」「エ、さうとは知らいで是はしたり」「コレハしたり」「コレハしたり」と、絶え

て久しき名乗合、問うつ問はれつ憂き事の、つもる數々啾合ふ、様子聞きるる娘のお幾、「扱は
 ほんまの爺様か、お懐しや」と取組る。別程經し親子の名乗り、流石剛氣の郷助も、親は泣寄
 目に涙、大つけなうて哀なり。母の聲ぞと聞くよりも、高尾は奥より走り出で、「おなつかし
 や鼻様、苦界の身の悲しさは、長の年月音信せず、ようまめで居て下さんした。殿様のお世話
 にて、曲輪を出でし程もなう、御身に迫る憂き難儀、暫しの内の御不自由と、大事の殿様お供
 して、お前を目當に」「ハアそんなら何と云ふ、殿様のお供して」「アイ、さつきにから奥の間
 に」と、聞いて心も落付く郷助。何思ひけん母親は、高尾が手を取り門の口、突出して戸をぴ
 つしやり、「そなたは爰に置く事ならぬ、何方へなりとも勝手に行け」と詞に悔り、眞エ、
 そりや又なせでござんするくく、縦へどう云ふ事有りとも、殿様の傍放れ、脇へとては行
 く事いや、悪い事が有るならば、堪忍して下さんせく、コレ鼻様。詫言して給も妹」と、お
 ろおろ涙ぞ道理なり。「妹構ふな、神浪様もお構ひなされな。ヤイ高尾、科は身に覺有る筈、
 東國にて誰有らう、肩を並ぶる人もなき、冠者太郎義綱公、お膝を入るゝ所も無う、見苦しい
 破屋へ、お入りなさるは誰故ぢや。今こそは此身なれども、古へは高橋幸内教俊とて、秀衡公
 の御扶持人、いかに流浪したればとて、現在の己故、お家を亂し殿様に、御惡名付けさせて

は、過行すぎゆかれた幸内殿かうないどの、先祖せんぞへ對し云譯いひわけなし。御家中ごかうちゅう廣き其中そのうちに、忠臣ちゆうしんの武士ぶし有らば、己おのれを殺ころして惡道あくだうの、根ねを斷たつ人の有ありもやせんと、母ははが覺悟かくごはコレ爰こゝに」と、佛壇ぶつだんより取出とりだす位牌ゐはい、
「俗名あきみやうたかキ高尾たかおと記しるせしは、けふは娘むすめが殺ころさるゝか、明日あすは死骸しがいを送おくるか、我子わがこの死しぬるを待兼まちかぬるも、古主こしうの御家おいえが大切たいせうさ。夫そもあの世よで御主君ごしゅくんへ、心こゝろばかりの申譯まうしわけ、片時かたときも殿様どのさまと、御一ごいつ所に置おく事ことならぬ。うろたへて爰こゝに居ゐば、七生しちしやうまでの勘當かんたうぢやぞ。サア、皆様みなさま奥おくへ」と、母の詞ことばは理りの當然たうぜん、押おして留どめめん様やうもなく、後あとに心こゝろは殘のこれども、是非ぜひなく奥おくへ入いりにけり。外そとにしよんほり枯紅葉かれもみぢ、思おもひ高尾たかおがとやかうと、思案しあんに心案定しあんさだまらず、「エ、胸欲むすぶぢやはいなア鼻様かいさん、殿様どのさまをお主しうとは、私わたしもよう知しつてゐる、逢初あひそめてから二三度にさんどは、御異見ごいけんしたけれど、つひ其内そのうちにいとしう成なりり、一日いちにちお顔かほを見ぬ時は、私わたしは人の心こゝろも無なう、お主しうも家來けらいも打忘うわすれ、夜毎よごみ々々々々に添そひぶしの、あかぬ別わかれの曉あかつきに、往いなうと有あるを引ひきとめて、つひ夫それなりに居續ゐつづけ、高かうじくゝてお身みの仇あだ、皆私わしからの事ことなれば、いつそ身みを投なげ死しなうにも、お腹なかに宿やした此こののやゝは、私わたしが子こでもお主様しうさま、死しぬるにも死しなれぬ身み、どうぞ夫それまで堪忍かんにんして、お傍そばに置おいて下くださんせ。やいのくゝと戸かどを叩たたき、悶もだえ焦こがれて泣居なきゐたり。内うちはひつそと靜しづまりて、應いへなければ涙なみだをとどめ、「ア、さうぢや、何事なにことも皆先世みなさきせの業ごふ」と、邊見廻あたりみまはし拾あひ取る、小石こいしを入いる

る袖袂、駈け出でんとする後へ、ぬつと出でたる浮世渡平、片手に高尾を鷲掴、我家の内へ放り込み、其身も共に入相時、蚊の泣音さへほそぐと、近所洩れくる夜なべ歌、明君と逢ふ夜の障りは月夜、月も忍ぶか笠を召す、月も忍ぶか笠をめす。獨ア、イヤ只今夫に参ります、私はちと内證に用事を仕廻ふと直様夫へ。お袋の云はるゝ一分始終尤ぢやが、若い女中を只一人、外に置くのは危い物、高尾様くくく。ハアコリヤまう爰に人氣は無い、ア、氣遣ひなく、というて奥には女ばかり、此家を明けて出られもせず、どう仕た物で有らうなア。いか様世界は味な物、殿のお傍に附添うて、片時放れぬあの高尾、義理詰に成つたれば、別れねばならぬ時宜、又十六年前に別れた娘、縁有ればこそ廻り合ひ、切つても切れぬ血筋の縁。和泉の小治郎定倉殿、某へ密かの書面、此度秩父の重忠公より御狀到來、其趣は、殿の御身持上聞に達し、御覺宜しからず、されども先祖の戦功に感じ思召し、義綱が放埒の、元は傾城高尾故、此女の首を打ち、一家中の心を堅め、義綱を補佐すべし、大將の御前は重忠宜しく計らはんとの御内意、其方は人知れず、高尾を打つてくれよとの事、おのれやれ、お家の爲と請合ひしが、長の年月我娘を、世話にしてくれたお澤殿、其大恩の有る人の、眞實の娘の高尾、どうマア是が殺されう、というて助け置く時は、定倉殿の詞も無足、ハテ何とした物で有らう。

ソレ我娘のアノお幾、幸年も似合頃、高尾殿の身代に、ム、さうぢや〜」と立上り、「思へば思へば因果な娘、生れた年は母に放れ、久しぶりで廻り逢ふ爺親が殺すとは、いかなる業か報か」と、人目無ければどうと伏し、聲を立てかね忍泣。表に人音一寸遁、せめて暫しの命なと、かばふは恩愛合の間の、襖引立て入りにけり。我家の内よりそつと出る、渡平は跡の掛がね締め、傍見廻し隣の内、入るより早う高笑ひ、「ハ、、、コリヤモウお天氣でござります、勦は此方に居りませぬか。お袋様は看經か、ア、なむまみだ佛、南無阿彌陀佛。ハアコリヤ皆お留守かえく。そしてお客でも有つたかして、盃や銚子鍋、エ、何かナ、コリヤ私に吞めと云ふ事ぢやな、是は御馳走でござります、イエ〜肴には及びませぬ。エ何ぢや田樂を拵へてくへ、アイ〜忝うござります。そんなら此燗鍋も爰へ乗せ、ア、コリヤ火が溫い、炭を一杯取つてこう」と、餘所の勝手手審しいは、何國の浦でも寡の性根、我物いらす十能に、一ぱいの炭打明けて、吹付ける内はつちりと、炭のはねるに恟りし、「エ、けたいな炭ぢや、すでに顔を焼かうとした。おれが顔に焼所をしたら、玉子娘に成るで有る。ヤ、何ぢや美臭い美臭いは、貴い衆の巾の匂がする、何處ぢやの〜。ハテ不思議や今此下駄のえならぬ匂ひ、最前使の詞と云ひ、正しく此家に冠者太郎、ム、ヨシ〜」と、一人うなづき指足し、下駄

取上とりあけて土打つちうち拂はらひ、傍あたりに人もないしようの、明あいた戸棚きはいを幸さいと、そつと這入はいつて内うちから戸きを、仕濟しすまし顔がほに忍しのび入いる。かくとはいさやしら張はりの、行燈あんどう提さげて娘むすめのお幾いく、裾すそもほらく立出たたいでて、「此こマア重三しげさう様さまは何なにしてぞ、エ、モ人の思おもふ様やうにも無い、早はやう戻もどつてくれたがよい」と、日ひにいく度たびか取上とりあける、合鏡あはせかざみも引きわくる、母ははは奥おくより立出たちいでて、「お幾いくや、又また髪かみを結ゆひ直なほしやつたか、身みだしなみをきつう仕しやるの。ほんにそなたに云いひたい事こと、マアく爰こゝへちよつとおぢや。コレ、今いままでとは違ちがふぞや、實じつの爺御ていごの手前てまへも有あり、あの様やうに育そだてたかと、思おもはるゝも恥はづかしい、といふは重三しげさう殿どのとそなたの中なか、有あるまい事ことではなけれども、心こころの知しれぬアノ渡平わたりへい殿どの、其息子そのむすこの重三しげさうとの縁組えんぐみは、どうもつまらぬ物ぢやぞや。若わかい時ときの一盛ひみさかり、面おも白しろい程ほど厭いときも早はやい。コレわしが悪い事わるいことは云いはぬ、マア一旦いつたんは退のいて仕舞しまひ、末すえではどうとも成なろぞいの」と、母ははの意見いけんを聞きく悲かなしさ。「皆もつ最ともな御事おんことなれど、重三しげさう様さまと私わたくしが中なか、未み來らいまでもと云いひかはし、必かならずず退のくな退のくまいと、雛ひな様さままでを誓せい紙しに入いれ、堅やく約束やくそく今更いまさらに、退のかれう物ものかコレ噂かざ様さま、是こゝろばつかりは堪忍かんにんして、どうぞ添そはして下くださんせ」と、娘むすめ心の後あとや先さき、つまらぬ様やうでも義理ぎりは義理ぎり、立たて通とほす氣きぞ道理だうりなる。奥おくより出いづる神浪かみなみは、母ははを押退おしけ、お幾いくが胸むねぐら取とつて引ひつする、「ヤイ爰こゝな恩知おんしらずの女め郎らうめ、最前さいぜんより始終しじうの様やう子は皆聞みないた、大恩だいおん請こけたお袋ふくろの、言ことを分わけたる

今の異見、よう口答ひろいだな。イヤコレお袋、此娘にさつぱりと、勘當をして仕廻はしやれ。實の親の折檻は、どの様な物ぢや己見をれ」と、娘を引立て出づる門口、「ア、コレ待つた山左衛門殿、血を分けた高尾が身替り、義理有る娘を殺さしては、此母が世間へどうも濟まぬ」「ヤア何と」「サ斯程のよしい騒動に、些細な者の命をかばひ、似せ首の事顯はれたら、義綱公のお身の上、高尾をころして其首を、定倉殿の御目に掛け、一家中の臍を堅め、義綱公を御代に出さずば、忠有るものとは云はれまいぞや」「尤々、なれども此身の娘といひ、殊に腹には主人のお種、其高尾を殺す時は、主殺しの惡名通れず。コリヤ娘、そちが命を捨つればな、親は主君へ忠義と成り、義綱公の御身も納る、養親の爲にも古主、コリヤ聞分けて命をくれい、と云ふ物の其方も、たましく逢うて悦びし、其日も去らず手に掛けるも、先生からの定り事、親子の縁も盡き果てよ、いつそ逢はずに仕廻うたら、殺す心も有るまいに、なま中に縁盡きず、廻り合ふと殺さるよは、因果の道理と諦めて、堪へてくれよ」と聲を上げ、わつとばかりに泣居たる。娘は始終聞くよりも、父が前に手をつかへ、「勿體ない其悔、お主のお役に立つといひ、姉様のお身替り、願うても無き身の果報、さりながら一つのお願ひ、どうぞ聞いて下さんせ」「早う言へく」「アノ、其お願ひと云ふのはな、身替

に成る事を、暫く延べて下さんせ。其内には唄様のおひえも仕立てゝ仕廻ひたし、七觀音の其間、清水様へも参りたし、マア一月も四五年も、立つての上のお身替」と、何を云ふやら譯もなし。「ヤア、そりや己何を云ふのぢや、最前より様々と、言を譯けて云聞かすに、コリヤうぬ、命が惜しいのぢやな。エ、未練者め、卑怯者」と、刀するゝと振上ぐる、娘はわつと飛退いて、「コレく申しお唄様、アレ爺様が私を切るといなア。切られぬ様に詫言をして下さんせ」と、聲もしどろに震ひ居る。「オ、氣遣しやんな殺さしやせぬ。コレ神浪殿、可愛さうにアノお幾はの、年端の行かぬ心にも、生さぬ中の義理立てゝ、色々に氣を付けてくれる物、夫を知つて親の身で、繼子ぢやゆゑに殺したと、どう夫が見てゐられうぞ。何ほうでも身替に、殺さぬくく」と、義理に假言つけ有様は、可愛さあまる母の慈悲、「唄様嬉しうござんする、お前の蔭で助かつた、つれない爺様なう怖や」と、逆行く帶際引戻し、「エ、情ない根性ぢやな。コリヤヤイ、科有つて殺すなら、我が代りに此骸、一分だめしに刻まれても、見殺しにする物か。親は百倍惜しけれど、殺さにや成らぬは人界の、義理と恩とに責められし、おれが心を推量せよ。何時まで云うても詮なき事、覺悟せよ」と振上ぐる。母はちつとも身を惜まず、「アコレくく神浪殿、必ず聊爾せまいぞや」「ハテ扱お袋、惡

いた簡、迎も助けぬ彼が命、かばひ立して怪我せまいぞ」と、ぢりょくと付廻す。「アレ
アレ堪忍して下さんせ。嘸様退いて下さんすな」「氣遣しやんな切らしやせぬ」と、母は我子の
覆ひに成り、殺さすまいとかばふ親、忠義の爲に殺す親、思ひは二つ三俣に、水越すばかり
浮く涙、涙々は陸奥の、船も浮めん風情なり。人に知られて詮なしと、思ひ切つても手もたゆ
む。始終の様子隣から、聞居る高尾は身もよも有られず、走り出でて表の戸、碎けよ破れよ
と打ち敲けば、懸金はづれ開く戸の、としやおそしと我家の内。南無三寶と神浪が、隔つる
母を及び腰、たぶさ攔んで提切に、首をはつしと打落す、死骸に取付き母娘、前後正體なき居
たる、心ぞ思ひやられたり。神浪も恩愛の、胸にせきくる涙を押へ、せめて死顔清めんと、首
引寄せて取上ぐる、たぶさに結込む一通は、爺様參る幾よりと、聞くより母は涙ながら、「ヤア
扱は覺悟の有つたのか、但しは何ぞ望事、ドレ其見せて」と取纏る。「ア、イヤ、此様な未練
もの、死んだ後まで恥洒し」と、引裂く手先に取纏り、「なう縦へ未練な事有りと、是に上こす
形見はない、私に讀まして下さんせ」と、高尾が泣くく押開き、又「松は千とせを盛とし、
朝顔は一時を一期とし、何事も先生よりの定り事と諦めらう。わたしは首を討ち、高尾様の身
替に成されん由、其場に成つたら歎におくれ、よもや得討ちなされまじと、態と臆病に成り、

卑怯な最期を致しぬ」「ヤア」又「機嫌を直され、只一遍の御廻向のみ、未來の樂みに致しぬ」母「ソレ見やしやんせ神浪殿、是でも臆病者かいなう、卑怯者かいなうくくく」神出かしたなく、オ、さう云ふそちが心と知らず、未練者卑怯者と云ふたのが、今では面目ないはい。コリヤ娘よ、こらへてくれいくやい」又「唄様へ申残しぬ」母「何と書いて有ぞいのくくく」又「エ、西も東も覺えぬ時より、十年に餘る其間、生さぬ中の隔ても無う、可愛がつて下さんした御恩も贈らず、先立つ不孝の程、御堪忍なされ下されぬ。エ、未來の唄様に逢うたり共、やつぱりわたしはお前様を、眞實の唄様と存じぬ」母「オ、さう思うて給るかいのくく。コレ何處までも親子ぢや程に、氣を慥に成佛してたもやくく」又「取分け心に掛りぬは、高尾様の御事頼上げぬ。只一言申上度事御座ぬへども、爺様の手前恥しく、得書残し申さず、よきに御推もじ願ひ上ぬ。申す事は數々なれど、心急かれ候まゝ、惜しき筆留ぬ」と、讀む内父はそぞろなく、歎けば母は聲を上げ、「恥しいと書いたのは、重三殿の事で有る。オ、此母が呑込んでゐる、コレく必ず迷うてたもんなや。思へばく可愛やな、貧しい中でしをたらと、何角に付けて苦勞さし、いつ花やかな事も無う、憂身の果は此様に、親の手にかけて殺すとは、いかなる業か報か」と、親々首に抱き付き、抱き付いて伏し轉べば、高尾も共に泣きくづをれ、前

後正體歎きしは、理せめて哀なり。戸棚くわらりと浮世渡平、「奥の一間に冠者太郎、忝なし」と駈け行くを、しつかと取つて、「どこへく、義綱公の御座在るとは、何を證據」と云はせも果てず、以前の下駄を取出し、火鉢へ投げれば災々と、匂ひは四方に薫じけり。「ソレ其銘は薄紅、日本國中廣しといへど、伽羅にて作れる下駄履かんは、義綱ならで何國に有る。小言いはずとや爰放せ」と、裾振切つて駈出せば、「モウ是まで」と切付くる。抜けつ潜つ死骸にて、丁ど請くれば血は滴り、流込んだる以前の爛鍋、仕てやつたりと引提けて、一間の内へ駈けこんだり。何國までもと駈行くを、夙より窺ふ重三郎、走入つて支ゆるを、「己も敵の廻し者、觀念せい」と切付くる。抜合して上段下段、互に手練打合ひしが、重三郎は請太刀も、しどろに成つてたゞくく、よろめく裾を蹴上けられ、どうど轉ぶを乗かより、胸元押へ、只一突の其勢、「ヤアく神浪山左衛門、必ず早まる事なかれ」と、障子をさつと義綱公、敬ひ守護する渡平が有様、さしもの神浪恠りし、呆れて詞も無かりけり。義綱公は嚴然と、「佞人どもの計ひにて、近頃より心亂れ、晝夜分たず姪酒に溺れ、始めて心付いたる今日、國の爲に汝が娘、殺害に及ぶ事、忠義とは云ひながら、娘が最期不便や」と、仰にはつと頭を下け、「ハハ、ハ、ハ、コハ有難き御仁心、娘を切りしは某が寸忠、恐れながら君の本心、いかなる故」と

尋ねれば、渡ホ、夫こそは此渡平、貝田が行ふ邪術にて、心惑はせ給ふ我君、辰の年月揃ふ女の、肝の臓の血を取つて、熱酒に合し、伽羅にて煮じ是を差上げ、彼術を立所に塞く事は、奇妙院が懷中の一卷にて、我よく知る。此家の娘の血を以て、我君に奉れば、ハ、、、、斯の如く本心に成り給ふ。最前高尾を手込めせしも、過をさせまい爲、暫く身を窶し守護する我は、熊川源五兵衛秀影、以後は互に申合さん「神ハ、ア適忠臣さりながら、某稚き砌より、能く見知つたる熊川氏、似ても似付かぬ顔形」「ホ、、、、是こそは館にて、數多の組子をささへる折柄、毒に當りて此のごとく、相格變るは一つの方便。傳へ聞く晉の豫讓は、漆をさして形を變ゆる、我は夫には引かへて、敵より注ぐ毒藥は、反つて味方の天の賜物、味方顔して敵の計略、一々に告げ知らさんは、我方寸の内在り。ハ、、、、嬉しや悦ばし」と、勇立つたる有様は、實もゆゑしき忠臣なり。義オ、頼もし方々、さりながら、先祖より傳はる政宗の刀、紛失するも我が誤り、二度代を知る心はなし。松ヶ枝節之助を付置いて、鶴喜代に世を譲り、是よりは程近き、加茂川に隣りたる砂川に屋敷を建て、我と我身を押込め隠居「熊御尤なる御詞、高尾殿も諸共に、御供をさせ申さんが、一所に置けば諸家中の心揃はず、身替も詮なき事に成り果てん。ヤア／＼忤重三郎、高尾殿を同道し、近江路へ立越えて、眞野の知るべに身を

忍べ」「ハ、畏り奉る、しかし難儀は高尾殿、若輩の某が一所に連れて立退かば、高尾が誠に語らひしは、重三郎と流布せんか。よし惡説も忠義故、些細な事は顧みず、佞人亡びて其後は、高尾殿の代りに死せし、お幾が爲の初發心、行方定めぬ修行の身、夕べは川に浪枕、朝は土手に身をこらし、名を道鐵と改めて、一字の寺を建立せん」神ホ、實頼もしき志、娘が爲の善智識、我は是より此首を、定倉殿へ持參して、區々なりし一家中の、臍を堅むる忠義の門出、イザお暇」と立出づる、母は引留め、「なう暫し、けふはいかなる日なるぞや、一人の娘に生別れ、一人の娘に死別れ、跡に残りて老の身は、何とか成らん」浮草の、うき世に秋の紅葉ちる、高尾も共にくどくと、歸らぬ歎人々も、萎るゝ心取直し、振切る袖や濡るゝ袖、包む涙は身に餘る、義理と恩義と忠義とに、別れくゝて三重出でて行く。

第五

王城の、隣に並ぶ上郡は、日出度御代にあふみ路や、蕪川魚渇水に、事缺かぬ國唐崎も、矢橋も比良も目に付かず、錦戸刑部が家來大木戸門兵衛、大勢引連れ濱邊の砂道、「家來ども參れ、云聞かす子細有り。渡平汝もとくと聞け、主人刑部殿大望の御企、コリヤ早わいらも知

る所、貝田殿の計らひにて、冠者太郎義綱も、砂川の屋敷へ押込め隠居、鶴喜代も術を以て自滅さするに間は無し。時に彼高尾が事、定倉が計らひにて、首討たせしと風聞有れども、其沙汰さだかならざる所に、重三と云ふ奴が、高尾を連れて近江路へ立退くと、問者が知らせに某を召され、汝は是より近江路へ立越え、義綱の種を孕んだ高尾、切殺し立歸れ、敵の末は根を枯らすとの仰付、夫故に御覺の一腰を賜はる、ガコリヤコレ主人の御重寶、指添なれども波の平行安、斯くも御恩に預る某、此事屋敷で語らんにも、餘り火急の事なる故、爰までは一跨け、近江路と聞いたばかり、雲を掴む尋者、何時までかゝらん程も知れず、夫故路金は不斷に蓄へたり。此處までくる道にて、高尾くさい者を見ず、縦へ高尾に逢うたりとも、生物を殺す事、某は大不得手、夫故汝を召連れたり。ヤレ／＼しんどい息が切れる、皆も休め」と大道に、主がすわれれば家來ども、同じ座席に居並びて、門ア、大きな池ぢやなア、シテまあ爰は何と云ふ處「ハイ是が彼近江八景の中、堅田の浮御堂でござります」門スリヤ早爰は近江路な、聞きしに勝る風景々々。堅田の浦の釣小船、浪にもまると、ヨイ如くなりと、古い書物で知つたれども、目前見るは今が始、定めて此湖には、鯉や鮒が澤山ならん。鰻四五本欲しいなア、肴にして一盃呑んだら、風景も一入ならん」「イヤモウ其様な魚は澤山、時によると八九尺から

一丈餘りの鯨が取れます」門「ハテ扱えらい物が取れるな。其様な魚は、氣味が惡うて喰はれまい」「イヤ又氣味の悪い事を云ふなら、此所は川童原、何時とも無う化けて出て、老若男女の別ちなく、彼裏門を念がけます」門「ヤア、シテ其川童は晝でも出るか」「イエ、く日中には出ませぬが、日の暮前からそろく」と門「エ、是は又ひよんな所へ來合したはい」「イエ、くお氣遣ひなされますな、私は爰らの生れ、氏子には手指もせず、其川童の親玉は、即ち此の浮御堂様」門「スリヤ何と云ふ、浮御堂の氏子が居れば、川童、サアノお川童様はお構ひなされぬか、夫でもどうやら氣味が悪い。しかし日暮までは間も有らん、コリヤ、く家來ども、何をうつかり、其方どもは此近邊、高尾が行方證議して、日暮前に早う歸れ、早くく。コリヤ小人數なりと見こなして、裏門好みの川童殿に、穴取られては叶はぬぞ、急けく」と權柄に、主と山路へ家來ども、當所も無しに尋行く。「イヤ何渡平、浮御堂へ參詣し、武運長久祈らん間、身に續いて參れ」

道行夏野のさらし井

世の憂き目、見えぬ山路へ入らんには、思ふ人こそほだしなれ。ほだしの種を身に持ちて、剛

れぬ旅路の旅はどき、草鞋引きしめくゝて、登る坂路爪先の、高尾を連れて重三郎、都を夙に
 起き別れ、心は跡に引かざるゝ、牛石右手に行く末は、何とかならん道草も、泣いてしをれて
 たどくゝと、せめて暫しは逢ふと見る、夢路に泊る宿もがな、つもりくゝし憂き事の、あふみ
 路さして辿り行く。人目堤をふたり連、樵る童が打群れて、若い女夫と悪口も、何の儘よと聞
 捨て、山中の宿打過ぎて、峠はるかに見おろせば、誰かしらべん琵琶の湖、操る如き細路を、
 分けつゝ來つゝ行きがてに、在の女夫が打まじり、中好ささうな連節に、唄一つくすやにくゝ、
 四季の花、粹な水仙室咲の梅、いとしかはいと撫子の、よれつもつれつ糸櫻、垣根卯の花杜若、
 からざを歌の夫婦合、可愛らしいぢやないかいな、此方の最良と、二人しつぽり抱柏、返事菊
 蝶比翼に縫はせ、好いたくわん菊四つ紅葉、行きつ戻りつ香の圖の、戀に戀ひわび瀧登り、笹
 龍膽の二つ紋、可愛らしいぢやないかいな。鄙も變らぬ妹背中、「ア、羨し我とても、勸氣は
 なれ殿様と、逢夜重る鵲の、標もとだえて此様に、つらい別の其上に、妹とてもむごらしい、
 はかない事もわたし故、嘸かゝ様も今頃は、泣いてばかりござんせう。世を忍び住む命さへ、
 憂事つもる身の上に、又此末はいかならん」と、返らぬ事をくどくゝと、かこち歎くぞ道理
 なれ。重三郎も諸共に、過ぎし夜すがの事共を、思ひ續けて俱涙、歩みかねてぞ居たりけり。

「護國寺山内辨才天建立」辨天坊あじろ笠、鼠の麻衣、生木綿の白布子、手甲股引きとしけに、建立箱背に負ひ、子供に囃されて餘所目は二本棒、誠は行坊強い坊、鈴打鳴らし町々を、大福長者を授くる利生のそつそ坊、そよよ、そよくさ來かゝる道筋に、見合はす顔は、「ヤア兩拳様」「ほんにお前は高尾様、袈裟衣から齋非時のと、常住お世話に成りました、私が爲の一旦那、後の月から行方は知れず、方々尋ねに出ましたが、思ひがけない好い所で、是から愚僧もお供する。見れば大分泣いた顔、なぜ浮きくと成されぬぞ、そよよ、それく覺えてござりませう、お前様と義様と、味な座敷へ此坊主、あたまの様にまん丸う、挨拶をして床の内」高「サイナ、わたしも云ひがかり、背中合して寢て居ても、つい夫なりに張弱う、中直りすりや明の鐘、憎うてならぬ鳥の聲、何の鳥が意地悪で、鳴くぢやなければ後朝の、往なせともない心から」兩「ソレヨちつとも離れかね、身仕舞部屋へよし様を、引きずつていて其時に」高「眉も引かずに鐵漿付けて、よう似合うたか見ておくれ、こつちへ寄りなオ、嬉しと、傍へ引寄せ引きしめて、二人の顔を一面の、鏡に寫し見た物を、今は夫には引きかへて、いつの月日に逢ふ事も、知らぬ田舎へ知らぬ路、言問ふ人もなつの日に、乾かぬ袖のうき涙、かはいと思つて下さんせ」と、歎く涙は路もせの、小川に水や増しぬらん。一人も俱に露涙、萎るゝ心取

直し、「必ず歎き給ふなよ、頼て御代になし奉り、一つ枕にあひの手の、歌の唱歌も色めきて、味な縁からつい馴染て、末の約束固めの枕、渝らぬ契と思はんせ。オ、それ夫が本かいな、つとめつとめもつい馴染めて、寐るに寐られぬうたゝね枕、逢ひたさ見たさは皆一つ、オ、それ夫がほんかいな。ほんに浮世は儘ならぬ、アレくく、日も山の端にをちこちの、落人と人や見とがめん、いざさせ給へ」と手を取つて、急ぐ道筋程もなく、群れ居る鴈の翼さへ、頼まん方も片だより、堅田の浦にぞ著きにけり。近江路は、餘所の國より悲しさの、まさる憂身の浮御堂、こなたに暫し立休らひ、「イヤ申し高尾様、道筋とても油斷がならぬ、是から眞野へは程もなし、知邊の方へ急がん」と、皆打連れて行く向へ、とくより待得し大木戸門兵衛、渡平諸共現れ出で、「ヤアく夫へ打たせ給ふは、都島原に隠れなき、三浦屋の全盛太夫、高尾の君と見しは僻目か、正無うも敵に後を見せ給ふか、反し合して勝負あれ。斯く申す某は、關八州に隠なき、大木戸門兵衛臂利なり、しばさせ給へ」と呼はつたり。重三郎は物をも云はず、一腰抜いて切り付くれば、請合して丁々々、切合ふ後兩拳に、渡平はなにか囁けば、心得傍見廻して、駈入る間もあら笑止や、門兵衛刀打折られ、しどろに成つて、「ヤアく渡平、兩人共に搦捕れ、取逆しては汝が科、詞番うたあらがうな」と、口は達者に雲霞、砂道蹴立て逆けたりけり。渡平

はしづく身拵へ、傍へ立寄り、「重三郎」「ヤア親人」「コリヤ、何にも云ふな、コレ斯うく、ナ、合點か」と二打三打、打合ふ體にて程よき所、「コリヤ捕つたは」と用意の早繩、コレハと立寄る高尾も共に、同じく掛ける三寸繩、二人を引立てつれ立てば、遠目に斯くと大木戸門兵衛、走り歸つて、「ホ、ウ手柄々々々々、某程の武士なれど、敵に刀を打折られ、逃けるではない引退く、コリヤ是恥に似て恥にあらず。往んじ壇の浦の戦、箕尾谷四郎國俊、景清に刀打折られ、少し汀へ引退きしを、誰か一人臆病と言はん、今の代までの美談ならずや」「ア最よござります、お前の恥ぢやござりませぬよ。シテ此二人はどう致しませう」「知れた事都へ引け」「是はしたり仰山な、イヤ申し、此邊に知方の有る奴原、取還されたら詮ない事、いつそ二人を切殺し、首にして歸りましよ」「妙計々々、然らば貴殿御苦勞ながら、ア、イヤ待てよ待てよ、最前も云ふ通り、生者殺すは大きな嫌ひ、ましてや是は人の首、目の前で切るを見たら、忽身共持病の癩、イヤくやはり京での事」「ハテ扱埒の明かぬ、コレ私がたつた一討、お前様も夫程怖くば、空向いて目を塞いでござりませ」「妙計々々、然らば仰に任さん」と、兩袖顔に押當てよ、あちら向いたる其隙に、二人の繩を解きほどき、又も囁きさよやけば、二人は彼處へ忍ぶ内、傍の畑見廻して、西瓜を二つばつさりの、音にきいやり「南無阿彌陀佛、南

無妙法蓮花經、浮世氏く、二人の者を仕止めたか「何の苦もなくざつぷりと、サアくお改めなされませ」なう厭な事く、まう見ずとよしにせう」「是は又卑怯千萬、夫でも武士と云はれますか」「ム、見ようかの、ア、氣の無い者ぢや、しかし怖い所を見るも主命、さりながら、首實檢には古實有り」と、兩手を顔の覆ひにし、指の間よりさし覗き、「ハツアいか様なア、生顔と死顔は相格の變る物、今までは二人共、艶やかなる顔なりしが、虚氣味惡う眞青に、少し赤みの見えたるは、血の流れたる所ならん。切口の立派さは、適勇々しき手の内や。待てよ、待ちなさいよ、いかに切れた首ぢやとて、目鼻も口も何も無う、ずんべら坊主の此首、俄に瘡は搔くまいし、斯くも形の變りしは、ハテくく合點の行かぬ事ぢやなア」と諸手を組み、暫し見とれて、「コリヤ西瓜ぢや」遽や何と、ドレく、ほんに西瓜ぢや。ハテ不思議な、たつた今二人の首打放して間も無う、西瓜に成つたはコリヤどうぢや。門兵衛様く、コリヤ只事ぢやござりませぬ。浮御堂の近邊で、血をあへした其咎か、そろく日暮に成つて来る、お川童様も出やしやる時分、御用心を成されませ」「ヤア扱はさう言ふ事かいやい。夫ぢやによつて首打つ事は、よしてくれろと云うたのに、どうやら空も曇つてゐる。コリヤく渡平、まちつと此方らへ寄つてくれ」と、そこら眺める其折ふし、追々歸る家來共、「旦那」ワイと飛退き、

「ア、申し、私は何にも存じませぬ、渡平が業でござります、御免々々」と手を合せ、拜み廻りて震ひ居る。「是はく正體なき旦那の有様、人の見る目も恥ぢ給へ。コレ申し、家來どもでござります」「何家來ども、さう云うて身共を化すので有らう」「誓文々々、家來共でござります」「ドレ、ほんに家來だ、ヤイ、うぬら、言語道斷不届者、歸つたら歸つたと、そつと云へばよい事を、周章しう吐したで、武士の有るまじい、膽を榮種にして退けた。身が目通には一人も叶はぬ、何國へなりとも立去れと云ふ所なれど、今は云はぬ、餓鬼も人数ぢや、わいらでも力に成る。ソレ最前聞いたソレ、お川童様のお祟かして、何やらかやら怪しい事だらけ、サアくく一時も早う急がん」と、立歸らんとする折ふし、時分はよしと重三郎、浮御堂の時太鼓、しどろ拍子に打立つれば、ワット皆々腰も抜け、うろたへ廻る目先へずつと、顯はれ出でし兩拳が、「抑是は浦島太郎十代の後胤、川童の冠者乗好なり。ア、ラ恨めしや腹立や、汝神慮を恐れもせず、血をあへしたる咎に依つて、早々命を召取るなり。貴様の祕藏の情所、我神變に吸ひ取つて、穴じやう往生さしてやろ」「エ、氣味の悪い、イヤコレ渡平殿、貴様はあなたの氏子とやら、どうぞお詫をして下され」「成程々々、元はお前の業でも無い、主命故の儀相なれど、かう見た所がよつ程きついお腹立の様子、つい一通りでは合點は成されまい。ハテ

どうした物で有ろ、コレ、ござりまするか」「有るく」「夫をあなたへ差上げ、お詫言をして見ましよ。イヤ申し川童の冠者様、畢竟是は間違ひ事、あの者が申しますは、近頃憚りな事ながら、少々持合せの金も有れば、夫をお前に皆上げます程に、どうぞ御了簡下さります様と、ア氣の毒な物でござります、私を段々頼みます。今申した其金を皆取つて、勘忍しておやりなされませ」「イヤ金銀は人間の寶、川童道には有つて益なし。只金銀の其金の後の方におはします、彼ソレ、今の情所が所望なり」「ア、悲しや、どうやらおるとがくすぐつたい。コリヤく家來共、ソレ下の帶を急度しめて、裏門口を用心せい。武士の有るまじい、屋敷を餘り急いだで、不斷の儘の越中禪、締りが無うて便がない」と、主も家來も懷へ、手を入れ締める下の帶、下心有る浮世渡平、「彼奴出家だけ欲氣無し、物を云はしては惡からん」と、傍へ立寄り恭しくも、「うすくうさはもふさきか、ちんぶりかくさんきんにやうらい、とらやあく」と、低頭平身なしければ、譯は知らねど器用者、出たらめせりふの唐詞、「しやうちいにいづうばてれんてう、かすてらやうかんのせたんけい」聞くより渡平は此方へ歸り、「あなた様には龍宮育ち、日本詞をお遣ひ成さるりや、どうでも勝手が違ふ故、御苦勞なだけ腹立もきつい。そこで今の様に、龍宮詞で請答、先づは神慮を宥めて置いた。時に只今おつしやつたは、地獄の沙汰

も金とやら、龍宮界も有様は、去々年の大飢饉で、米が百に四合五勺、其揚句ゆゑきついつまり、成程路金を皆おこせ、又お前の大事の物を金と一所に上げたたら、今のソレ、穴錠往生は赦してやろとの御詫宣、サアく早うお上げなされませ」「スリヤ何と云ふぞ、貯へた路銀と、外に大事の物と云ふは、オ、ソレく、主人より賜はつたる此指添、二品さへ差上げれば、御了簡下さるか、忝しく」と、懷中探しこてくと、取出す打違袋有りだけ粉だけ、指添共に一つに掴み、「サ、是をあなたへ上げてくれ、一時も早いがいぞ。ア、コレく浮世々々、マアくお待ちよ、侍の事なれば、腰の物は無くてもよいが、打入つて相談が有る」選「爰から京へは餘程の路でござんすは」兩「サ、マ、マ、マ、うんと云ひなく、エ承知かく、此金を皆上げては、サ、マ、マ、マ、うんと云ひなく、エ承知かく。蕎麥を一膳食ふ事が成らぬは、サ、マ、マ、うんと云ひなく、承知かく。爰はどうぞお情ぢやが、南鐐一片残されまいかな」選「エ、けちな、神に物を吝しがると、忽罰をお當てなさると」「スリヤ罰をお當てなさるとか、ハテ是非も無い事ぢやな。そんなら南鐐とは云ふまいが、あなたのお名に象つて、川童六十四文は成るまいかの」「一文も半文も成りませぬ」「スリヤ一文も叶はぬか、ハア」はつとばかりに聲を上げ、かつぱと伏すと云ふ事は、此時よりも始まりける。「エ、ぐづくと、早うお上げなされ」

と、吝^をしがる物を無理無體、引つたくつて此方に向ひ、「青黄赤白黒、瑠璃紺路孝茶中赤藏、おいてうかふたんぶたうんすん、辰ヤア」と差出せば、氣味惡さうに手に取つて、匣^てかねんをとるんはうれしんが、どうやらしりんがきそんばか、午ヤア」渡^{うま}サア」門兵衛様く、サアく川童様の御機嫌が直つたく。神明納受の驗には、各方に悉く、福壽海圓滿樂、天筆和合樂の大福長者に成る結構な文をお授け成さるゝぞ、皆々お請なされませ。我等は其内神前を、拂ひ清めて參らん」と、何國とも無く出でて行く。「サアくコリヤく家来共、只今お授けなさるゝぞ、うぬらも心を清淨に。ハ、ア有難うござります」匣^{しやうぢやう}ヤレく皆の衆よ、正路に我は愛で、壽福の文を授くべし、龍神詞は分るまじ、日本流に教ゆべし。皆々信心凝らしつゝ、囃してくれよ凡夫たち、くくくく、はやしてくれよ凡夫たち、くく、左の腰を延べ、其の上に右の手を拳にして、大指を開き、小指の甲を曲け、左の掌の上に置く事しやほんの如く、是を以て則ち七度震動せば、貧所忽福者と成り、寶の藏を並べ立て、無量の財福を充滿する事、雨や霞の降るが如く、金と、銀と、錢と、瑠璃と、碑礫と、瑪瑙と、珊瑚と、琥珀と、眞珠の七寶出生して、大福長者と成る、なむはくじやきやらうかやしやぎやらべいしんたまにひんでんうんそはか、なうまくさらばたゞぎやてい、ひゆびじんばほくけいびやくさ

らばた、けんうどぎやてそはらけいまんきやぎやなうけんそはか、ごくさいしやうかやとんとく如意、寶珠わうたい辨才天、そよよ」こそくところこそ 三重立歸る。

第 六

いつまでも、變らぬ御代にあひ竹の、よゝは幾千代八千代經る、千代を壽く爪音は、鎌倉山に美を盡す、冠者太郎義綱公の奥御殿、懦弱の聞え隠れなく、砂川へ隠居ありければ、御長男鶴喜代丸、幼稚ながらも御家督定り、近き頃より御病氣とて、お傍には男を禁じ、諸士の對面叶はねば、家中を始め典藥まで、何としあんもせんじ様、常より館物さびし。諸士頭信夫の庄司爲村の後室沖の井御前、渡會銀兵衛が妻の八汐、褻姦しとやかに、禮儀正しく打通り、「イヤ申し八汐様、大殿義綱様御隠居遊ばし、御幼稚ながら御家督の鶴喜代様、此程より御不快とて、御食事も召上れず、殊更人に逢ひ給ふ事がお嫌ひとて、男を禁じて近習小姓も遠ざけられ、お傍には政岡殿、虓衆の外叶はず、何卒直に御容體、窺ひ申す私が心」「さればいな、手前夫銀兵衛は御膳部行と云ひ、今後見の刑部様の御出頭、夫さへ御對面叶はぬとは、コリヤ政岡の胸中に、深い所存が有つての事か、も今日は是非とも御容體、見届けねば下られずと、奥女中ま

で、申込み置いたれば、御保養旁追付け是へお出の筈、何かの様子とつくりと、心をお付け遊ばせ」と、二人が噂の程もなく、奥より竊走り出で、「殿様是へ御出」と、知らせの中に、まだ頑是なき鶴喜代君、お傍のお伽も同年、政岡が子の千松が、昇いて出でたる鳥籠の、エイエイサツサ愛らしき、跡に付添ふお乳の人、はつと二人は頭を下けて、恐れ敬ひ奉る。政岡御前に手をつかへ、「信夫の庄司爲村の後室沖の井、渡會銀兵衛の内方八汐、御病氣の御様子伺ひのため參上」と、申上ぐれば大人しく、「二人共よう見舞うてくれた、大儀々々」と情有る、仰にはつと恐入り、「誠に存ぜしよりも麗しき御容體、見奉りて我々が安堵、さりながら御食事進み給はぬ由、モ一家中の心遣ひ、恐れながら沖の井が、申付けし今日の御膳、少しなりとも召上られ下さる様、ソレ／＼早う」と詞の下、はつと答へてお傍の女中、捧ける膳の目八分、御前に直せば嬉しけに、「そんならモウ、飯食うても大事ないか」と、座に付き給ふを政岡が、尻目に睨まれもぢ／＼と、「イヤ／＼、おりやモウ飯は厭ぢや／＼。アレ見よ千松、雀が飯を食ひたいやら、口を開いて鳴くはいや、弱い奴ぢや」と乳母が顔、見やる目元に涙ぐむ、御心根のいたはしさ、ぢつと堪へて政岡が、「イヤ申しお二人様、あの通り御膳をお進め申しても、いやぢや／＼と御意遊ばす、お傍に付添ふ政岡が心遣ひ、御推量下さりませ。が醫脈を窺

ひ申さんにも、男たいせし者はお嫌、夫故に典藥も」「オ、此八汐もそこへ心の付きし故、御典藥大場道益が妻の小卷、女ながらも夫に劣らぬ醫術の譽、御容體窺はせん爲、召連れて参りし、ソレ召出せ」と詞の下、はつとお次へ娯が、やがて伴ふ年輩も、四十に近き二つ留、襦さばきもしとやかに、遙末座に手をつかへ、「恐れながら、大場道益が妻の小卷、御脈窺ひ奉らん」と、すり寄れば政岡が、いざと進めに鶴喜代君、御手を出させ給ひければ、恐れ慎しみ御脈體、とつくと窺ひ驚く面色、「ヤア、コリヤ是れ只今必死のお脈」と、いふに胸り驚く人々、暫し詞も無かりしが、沖の井御前不審顔、「イヤコレ小卷、御物ごし御顔色、常に變らぬ御様子、夫に必死の御脈とは」「ハア成程御不審御尤、仰の通り麗しき御容體、夫に引きかへ絶命の御脈は、モ何とも不思議、恐れながら若君様、是へ御越し遊ばされよ」と、遙こなたへ誘ひて、復も窺ふ御脈に、はたと手を打ち、「ハテ不思議や、あれにて見れば必死の御脈、今又是にて窺へば、常に變らぬ御脈體、ハテ怪しや」と眉に皺。政岡始め人々も、更に心は納らず、何思ひけん沖の井御前、長押に掛けたる長刀追取り、ぐつと突込む天井の、板腰放せば怪しき曲者、落つるを透さず取つて引伏せ、用意の捕縄手ばしかく、高小手手にくより上げ、沖お脈の不審の其根元、サア眞直に白狀せよ。陳ずるに於ては水責火責、憂目を見するがサア、何

と」と、きめ付けられて「ア、コレ申しますく、イヤモ斯う現るゝ上からは、有様に申しま
す。鶴喜代君を殺してくれと、頼まれたも褒美が欲しさ」沖ム、シテ其の頼人の名は何と」政
「サ何者に頼まれた」沖「サアく、どうぢや」政「サア何と」と、側に詰め寄る政岡が、顔を眺めて
「テモ扱も、アノしらぐしい顔はいの、其頼人は誰で有らうぞ即此方」政「ヤア何と」「ア、コレ
コレ、まう隠しても隠されぬ、千松とやらを代に立てたさ、若君を殺してくれと、ナソレ、頼ま
しやつたぢや無いかいの」「ヤア、コナ下郎めが大それた偽言、コリヤ自を科に取つて落さん
偽、己を頼んだ拵事ぢやな」「イヤコレ政岡殿、モいか様にあらがはれても、こなたの工とい
ふ事は、此八汐が睨んで置いた、とても叶はぬ覺悟召され」「ム、假初ならぬ一大事、とつくり
と正しもせず、妾が業とおつしやるには、何ぞ慥な」「オ、證據といふは其曲者、サ現在こな
たを傍に置いて、あの通りに言ふからは、モ是に上越す證據はない。がまだ其上にコレ此一通、
鶴が岡の神木の本に、埋めて有つた釘付の箱、内に込めたる願書の文言、若君を調伏し、我子
を出世させたい望、願主松枝節之助、乳母政岡と、有りく」と書いたが慥な證據、サ何と違ひ
は有るまいかの」「イヤく、夫も眞赤いな似せ筆、更々此身に覺えは無い、無實を言ひ懸け、跡で
後悔なさるゝな」「ム、是程慥な證據が出ても、まだ潔白なあらがひ立て、シテ又覺ないと云

ふ、サ證據が有るかな」「サア夫は」「サアく何と」と、詰掛けられて政岡が、覺なき身の云譯も、證據無ければ今更に、無念涙の外ぞ無き。「オ、云譯は有るまいく、云譯無くば遁れぬ科人、節之助諸共に、牢屋へ打込み急度糺明、今日より若君の御守役は此八汐。ヤアく侍中、政岡を縛り上げ、牢屋へ引け」と呼はるにぞ、若君はおろく涙、乳母が牢へ行くなり、おれも付いて行きたいはいやい」「エ、そりやマア何を御意遊ばす、八汐が申す事、ようお聞き遊ばせや。あの政岡はナ、君に敵たふ大科人」「イヤ科人でも大事ない、乳母は何處へも遣る事ならぬ」「デモ伯父様刑部様の仰付」「イヤく其刑部も其方達も、皆おれが家來ぢやないか。夫程牢へ入りたくば、政岡が代りに、そち達から牢へ行け。乳母と放れて居る事は、いやぢやく」と腕白も、自然と備はる仁心に、嬉しさ限り政岡が、身に沁み渡る有難涙、只手を合すばかりなり。追の八汐も主命に、返答無ければ沖の井御前、「君の仰までもなく、お乳の人に科は無い。朝夕お傍を片時放れぬ政岡殿、サ誠若君を害せんと思はゞ、人手を頼むまでもなく、仕様も様も有るべき事。サ夫に何ぞや此曲者、誠政岡に頼まれなば、一旦は隠れ遁るゝ筈、自が長刀の、光に脆く飛び下りしは、ハテ頼もしい頼まれ人、又道益が妻の小巻、必死の脈と云ひたるも、モあまり割符が合ひ過ぎて、此沖の井は吞込めぬ」ハ「ア、イヤ

夫ばかりでない此願書、願主松枝節之助、政岡と有るからは「沖イヤ／＼夫とても同じ事、かゝる大事を工む者が、有り／＼と名を顯はし、證據の種を残し置かうや。サ若しや其名が八汐と在らば、お前は科を被る氣か。モあんまり工が淺はかで、詮議立するお人まで、底意の程が心得ぬ。曲者めを拷問して、五十四郡を呑まんとする、工の底を白狀させ、惡事に組する方人ども、一々首を並べて見せう。サとつくと見物成されよ」と、此場の善惡明白に、見通す如き辯舌は、實も信夫の後室と、奥ゆかしくぞ見えにける。理の當然に拉がれて、八汐は尙も減らず口、「テモつべこべと能うおつしやるの、ガ所詮分らぬ水掛論、モ何時まで言うても同じ事、マア此儘に差措いて、追つての詮議夫までは、小卷も下つて休息召され」と目くばせし、伴ふ二人に一物の、有りと見抜きし後室の、眼鏡はづさぬ一捌、「曲者引け」と嚴重に、心は隔つ竹の間の、襖押明け入りにける。跡見送りて政岡が、正無き事も身に懸る、科は霽れても晴れやらぬ、養君の行末を、誰に問ふべき様も無く、心一つの憂き思、物案じある母親の、顔を詠むる千松に、鶴喜代君も打守り、「コレ乳母、モウ何云うても大事ないかや」「アイ／＼外に誰も居りませず、何なりとも御意遊ばせ。ほんに先に沖の井殿、若へ御膳を上けた時、豫て乳母が申した事、お聞入れ遊ばして、ようマアお上り遊ばさなんだナア。

夫でこそ此乳母が、お育て申した若殿様、オ、お出かし成された天晴な」と、譽むればあどなき稚氣に、「ヤイ乳母、ひもじいと云ふ事は、強い武士の云はぬ事と、常に其方が云うた故、おれは云はねど先から、空腹に成つたはやい」「オ、お道理でござります、今日は思はぬ事故に、御飯の拵へも遅う成り、あなた様にも嘸お待ちかね、千松もよう辛抱しやつた、モウ拵へて上げます」と立上れば、「ナウ乳母、ことに在る此膳を、給べるのは悪いかや」「ア、イヤ申し、其御膳を上げる程なれば、乳母も苦勞は致しませねど、此程から怪しい事ども、忠義厚き沖の井殿、差上げられた其御膳、疑ひはなけれども、油斷の成らぬ此時節、上げてよければ此政岡が上げます。コレようお聞き遊ばせや、今お館には惡人蔓り、御近習小姓膳番まで、ちつとも心は許されず。忠臣の節之助は、不義者として遠ざけられ、力とする者も無く、朝夕の御膳は皆庭へ捨てさせて、私が手づから拵へて差上ぐるも、若し毒藥の工もと、微塵心はゆるされず。空腹なお道理ながら、御前のおこらへ遊ばす爲、此千松も四五日前から、三度の食事もたつた一度、忠義故ぢやと堪へて居ります。コレ千松、そなたは云ふ事よう聞いて、何とも云はずに辛抱する。オ、賢い、強い、強者ぢや」と、譽むれば千松、「コレ唄様、侍の子といふ者は、ひもじい目をするが忠義ぢや。又給べる時には毒でも何とも思はず、お主の爲

には喰ふ物ぢやと云はしやつた故に、わしや何とも云はずに待つて居る。其替り忠義をして仕廻うたら、早うまゝを食はしてや。夫までは、翌日までも何時までも、かう急度坐つて、お膝に手を著いて待つて居ります。『お腹が空いてもひもじうは無い、何とも無い』と澁面作り、涙は出づれど稚氣に、譽められたさが一杯に、『こちや泣きはせぬはえ』と、額を撫でて泣顔を、隠す心は流石にも、名に負ふ武士の種なりき。母は健氣さいぢらしさ、目に持つ涙心には、御前に聞かす譽詞、『オ、さうぢやく強者ぢや、千松はいかう強う成りやつたはいの』『イヤ千松よりおれが強い。ヤイ政岡、おれはちつとも空腹には無いぞよ。大名といふ者は、飯も何にもたべずに、かう坐つて居る者ぢや。ナウ乳母、おれは強者ぢや』『是は又氣疎い事ぢやは、さうお行儀な所を見ては、まだく千松などは叶はぬく。オ、お強いく、さうお強うては、コリヤ早う飯を上げさ成るまい、ドレ拵へう』とかい立つて、傍へに飾る黒棚より、取出す錦の袋物、風爐に掛けたる茶飯釜の、湯の試を千松に、飲ます茶碗も樂ならで、お末が業をしがらきや、いつ水指しを炊ぎ桶、流す涙の水こぼし、心は清き洗ひ米、釜に移して風爐の炭、直して煽ぐ扇さへ、骨も碎くる思ひなり。『アレまう飯ぢや』と御機嫌の、我子も共に悦顔、見れば胸まで突つかくる、涙呑込み呑込んで、『モウ上げますぞえ』『鼻様早う上げましてや』『オ

オ上けませいで何とせう、今上けまする。まちつと煮立つ其間、お氣に入りの雀の子、モウ親鳥が来る時分、其處へ直してお慰」「アイくく」と千松が、返事はすれど立ち悩み、歩む姿もたよくくと、置き直したる小鳥籠、ちうと教へる親鳥の、軒端の竹に飛びかはす、子は孝行に面瘦せて、はぐくみ返す鳥羽玉の、涙を隠すうなひ髪、かゝれば直に飯に成る。「ソリヤもう飯ぢや」と悦ぶ子。「コレ千松、何とも無いと云ふ下から、忙しない何の事ぢや。何時も唄ふ雀の歌、唄うて御前の御機嫌取りや、エ、鈍な兒では有るはい」と、叱られておろく涙、しやくりながらの濕り聲、「こちの裏の齊墩の木に、く、雀が三疋留つて、く、一羽の雀がいふ事にや、く、夕べ呼んだ花嫁御、く」竹の下葉を飛び下りて、籠へ寄来る親鳥の、餌食みをすれば子雀の、嘴さし寄する有様に、「アレく乳母、雀の親が子に何やら喰はし居る、おれもあの様に、早う飯がたべたい」と、小鳥を羨む御心根、「オ、お道理ぢや」と云ひたさを、紛らす聲も震はれて、「わしが息子の千松が、く。エ、コレ千松、殿様の御機嫌を、エ、何を泣顔する事が有る、ちひさうても侍ぢや。コレ七ツ八ツから金山へ、く、一年待てどもまだ見えぬ、く」「乳母まだ飯は出来ぬかや」「オ、もう出来まする。二年待てどもまだ見えぬ、く」「噂様飯はまだかいの」「エ、忙しない、そなた迄が同じ様に、行儀の悪い」「イエく

わしはたべたい事は無けれど、御前様がおひもじからうと思つて」「エ、何のお強いお殿様が
 おせがみ成されう、ソリヤ其方がせがむのぢや」「イエ／＼私はせがみはしませぬ」「サアせ
 がまずば今の歌、聲張上げて唄うて見や」と、云はれて涙の聲張上げ、「ほろり／＼とお泣き
 やるが、／＼力なく／＼泣聲を、隠して連れる母親が、「何が不足でお泣きやるぞ、／＼」
 歌の唱歌も身に當る、涙はお乳が胸の内、子故の闇を遣る瀬なき。若殿小陰を打詠め、「アレ
 アレ千松、狎が来る呼べ／＼」千「狎よこい／＼」呼べば駆けくる縁の上、「オ、よい所へよう
 來たなア、ほんにわれは仕合せ者、おすべりの此御膳、殿様の御機嫌を、直した御褒美戴け」
 と、紙折り敷いて並ぶれば、悦ぶ體を見る若君、「乳母、おりやアノ狎に成りたい」と、羨み
 給ふ御風情、聞く悲しさを堪へかね、「オ、お道理ぢや／＼、日本國の其中に、幾億萬と限無
 き、人の果報を請け給ひ、五十四郡の御主と、榮耀榮華は上も無き、何暗からぬ御身にて、思
 ひがけ無い御辛抱、縦へ賤しい下々でも、斯ういふ事が有る物か。ましてや遂に見も聞きも、
 なみだながらに政岡が、申す事とおとなしう、聞入れ給ふ痛はしや。現在御内の御家來が、
 邪非道に組み従ひ、殺害せんととの工とは、知つたる故に陰身に添ひ、おまめな御身を御病
 氣と、世間を偽り胴欲に、稚い御身に朝夕さへ、思ふ様に上げぬ故、鳥獸の餌ばむをば、

羨うらやましがるお詞ことばは、御尤ごとうとお道理ことわりとも、云ふに云はれぬ御身おんみの因果いんぐわ、雀すずめや犬いぬに劣おとつたる、宮みや仕づかへして忠義ちゅうぎちやと、云はれう物ものか」と喰くひしぱり、跡あとも煮立にえたつ風爐ふうろ先さきの、屏風びやうぶにひしと身を寄よせて、奥おくを憚はやる忍泣しのびなき。稚せなけれども天然てんねんに、大守だいしゆの心備こころそなはりて、「コレ乳母うは、何なんで泣なくぞいやい、其方そちや千松せんまつもたべぬ内うち、おれ一人忙ひとひらしいと思おもふなら、モウ堪忍かんにんして泣ないてくれな。其方そち達たち二人ふたりがたべぬ内うちは、何時いつまでもおれは堪こらへてゐる。おれがたべても、乳母うはがたべずに死しにやつたら悪わるいナア。千松せんまつ、そちが死しんでも悪わるいナア」「ハイくくく、ようおつしやつて遣つかされます、ア、有難ありがたう御ござります。乳母うはが今泣いまいたのはな、アリヤ飯いひの早はやう出で来る呪まじなひ、何なんの悲かなしい事はことござりませぬ。コレモウ涙なみだは無い、御覽ごらんじませ、ホ、ホ、ホ、をかしいく。サアく今いまの呪まじなひで、モウ飯いひが出で来ました、いつもの様に、握にぎ々して上げましょ」と、飯いひ取とつて手ての内うちに、結むすぶを千年ちとせと待侘まちわびて、手てを出だし給たまへば、「マアく、お待ち遊あそばせや、吟味ぎんみの上うへにも吟味ぎんみせねば、御辛抱ごしんぱうのかひが無い、先御毒味まづおどくみ」と千松せんまつが、顔かほを眺ながめて、「ム、氣遣きづかひない、サアく御前ごぜん、御心静ごしんじやうかに召よしませ」と、云ふにいそく御悦おんよろこび、千萬石せんまんごくを手ての裡うちに、握にぎる御身おんみに引替ひかへて、只一握ひとにぎりの握飯にぎりひを、數かずの珍味ちんみと思召おもほしめす、御心根おんこころねの勿體うったいなやと、君きみを思おもひ我子わこを思おもひ、心の奥おくの忍しのぶ山やま、忍淚しのひなみだの折をりからに、「梶原かじはら様の奥方御入おんいりなり」と呼よはる聲こゑ、「ハテ心得こころえぬ、梶原かじはらの奥方おくかたと

は、何にもせよお通し申せ。コレ千松、そなたは次べ、常々母が云ひし事、必ず忘れまいぞ早うく」と追ひやつて、衣紋繕ふ其内に、沖の井八汐も出迎ひ、敬ふ襖押し開かせ、梶原平三景時の奥方、夫の權威にさかえ御前、しとくと上座に直り、「オ、何れくも出迎大儀、自今日來りしは、右大將の御上使、夫景時承はれども、義綱の一人鶴喜代病氣によつて、男たる者を禁じたると聞きし故、夫に代る此榮、義綱隱居の其後、鶴喜代の所勞、殊に食事も進まぬ由、御心を付けられし此御菓子、賴朝公より下され物、有難く頂戴有れ」と、持たせし菓子箱さし出せば、八汐引取り、「コレハく有難い大將よりの下され物、サアく申し若殿様、早う頂戴遊ばしませ」と、蓋押開き、「テモまあ見事な結構な此お菓子、イザ召しませ」と差出す。流石童の嬉しけに、立寄り給ふ鶴喜代君、「ア、申し御前様、又其様なさもしい事、御病氣の御身なれば、お毒に成つたら何と成さるゝ、此方へお越し」と政岡が、詞打消す榮御前、「ヤア賴朝公より下さるゝ御菓子、何疑うて頂戴させぬ、是非此榮が食べさせる」「ア、イヤ夫でも」「ム、但し賴朝公の仰は背いても苦しうないか」「サア」「サアくく」と權柄押、奥より走つて千松が、「其菓子欲しい」と引攔み、何の頑是も只一口、八汐が恠り榮御前、毒の工の顯れ口、忽惱亂目を見詰め、蹴ちらかしたる折は散亂、八汐は透かさず千松が、首筋片手に引寄せて、

懷劔ぐつと突込めば、わつと一聲七轉八倒、驚く沖の井政岡が、仰天ながら一大事と、若君押し遣る我部屋口、戸口に付添ひ守り居る。「ヤア何をさわく、騒ぐ事は無いわいの。忝くも頼朝公より下されし此折、蹴破りしは上への無禮、小い餓鬼でも其儘には差置かれぬ、夫故に手に懸けたは、お家の爲を思ふ八汐が忠節。ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、オ、可愛さうにく、痛いかいなう、く、他人の私さへ涙がこぼれる。コレ政岡殿、現在の其方の子、悲しうも無いかいの」「何のマア、お上へ對して慮外せし千松、御成敗は御家の爲」「ム、スリヤ是でも此方は何とも無いか、ヤ是でもか、是でもか」と、鬨殺しに千松が、苦む聲の肝先へ、こたゆる辛さ無念さを、ちつと堪ゆる辛抱も、只若君の大事ごと、涙一滴目に持ため、男勝の政岡が、忠義はせんたい末代まで、復有るまじき烈女の鑑、今に其名は芳しき。榮は始終政岡が、素振に氣を付け打ほゝ笑み、「オ、出かした八汐、右大將より鶴喜代へ下さると大切の御菓子、小盼めが出しやばつて、すつての事に大事の工、イヤ、アノ大事の菓子を荒した科、殺したは八汐が働、さすが渡會銀兵衛が妻程有る。政岡には自が、云聞かす事も有り、沖の井八汐兩人は、暫く次へ間を隔て、遠慮召され」と榮の詞、何と違變も沖の井が、深き心は和田津海の、汐の八汐も打連れて、伴ひ一間へ入りにける。跡先見廻し榮御前、政岡が傍にすり寄つて、「年頃仕

込みしそなたの願望、成就して懽悦び」「エ、何とおつしやる」「ア、イヤ、モ隠すには及ばぬ、
 東西分かぬ内よりも、取替へ置きしそなたの子の鶴喜代が身に恙なう、義綱の誠の駒千松が此
 最後、懽本望で有らうなう」「エ、」「オ、取替子の様子は先達て知つたれども、若しやと思ひ
 最前から、窺うて見る所、血筋の子の苦しみを、何ほ氣強い親々でも、堪へらるゝ物ぢやない。
 若殿にして置く我子が大事、そなたの顔色變らぬは、取替子に相違は無い。スリヤ皆心は同腹
 中、刑部殿とも内談しめ、諸事我夫の指圖有らん。先今日は立歸り、病氣の様子申上げん、必ず
 必ず何事も、人に覺られまいぞや」と、一人吞込み悠々と、館をさして歸らるゝ。跡には一人
 政岡が、奥口窮ひくゝて、我子の死骸抱き上げ、こたへくし悲しさを、一度にわつと溜涙、
 せき入りせき上げ歎きしが、「コレ千松、よう死んでくれた、出かしたなく。そなたが命捨て
 たゆゑ、邪智深い榮御前、取替子と思ひ違へ、己が工を打明けしは、親子の者が忠心を、神や
 佛も憫みて、鶴喜代君の御武運を、守らせ給ふかハ、、、有難や、有難や。是と言ふのも此
 母が、常々教へて置いた事、稚心に聞分けて、手詰に成つた毒害を、よう試みてたもつたなう、
 オ、出かしやつた。そなたの命は出羽奥州、五十四郡の一家中、所存の臍を堅めさす、誠
 に國の礎ぞや、とは云ふものの可愛やな、君の御爲豫てより、覺悟は極めて居ながらも、せめ

て人らしい者の手に懸つても死ぬ事か、素姓賤しい銀兵衛が、女房連の劔に掛り、なぶり殺しを現在に、傍に見て居る母が氣は、どの様に有らうどう有らう。思ひ廻せば此程から、唄うた歌に千松が、七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ、二年待てどもまだ見えぬと、歌の中なる千松は、待つかひ有つて父母に、顔をば見せる事もある。同じ名の付く千松の、そなたは百年待つたとて、千年萬年待つたとて、何の便があるぞいの。三千世界に子を持つた、親の心は皆一つ、子の可愛さに毒な物、喰うたと云うて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいと云ふ様な、胴欲非道な母親が、復と一人ある物か。武士の種に生れたは、果報か因果がいぢらしや、死ぬるを忠義といふ事は、何時の世からの習はしぞ」と、凝固まりし鐵石心、流石女の愚に返り、人目無ければ伏し轉び、死骸にひつしと抱付き、前後不覺に歎きしは、理過ぎて道理なり。後にすつくと八汐が大聲、「何もかも様子は聞いた、こつちの工の妨女、己も生けては置かれぬ」と、詞の間押明けて、「ヤア不忠不義の銀兵衛夫婦、工の次第白狀せよ」と、立出づる沖の井、「ヤア此八汐に白狀とは」「オ、其證人は爰に在る」と、云ひつゝ出づる顔見て恠り、「ヤアそちや小卷」「オ、好い證人であらうがの、夫道益に云付けて、無理に毒藥調合させ、此事外へ洩らさうかと、よう夫を殺したな。夫の敵と思へども、女の身の討つ

事叶はず、態わざと惡事あくじに一味いちみして、まづ斯かう手てめを上げよう爲、鶴喜代君と千松を、入替子いれかへこと云
 うたも小卷、夫故それゆゑに榮御前さかえごぜん、うまく此場を歸りしも、裏の裏行うらじかけんくじ加減、サア眞直まっすぐに白狀
 と、忠と不忠の喰合せ、毒藥却つて藥と成る、顔に似合にあはぬ配劑はいざいは、類たぐひないぎの手柄てがらなり。モウ
 是までと八汐くわいけんが懷劍、心得政岡うけなが請流うけながす、互たがひに嗜たなむ太刀さばき、手を盡したる二人ふたりの女、我子の
 恨うらみ一心いつしんに、突つきこ込む懷劍打落し、直すぐに切きり込む八汐が肩先かたさき、ひるむを捉とつて突つ通とほされ、虚空こくうを掴つかん
 で悶もがき死じ、惡の報めいいは忽いに、心地よくこそ見えにけり。「手柄てがら々々」と沖の井小卷、共に悦よろこぶ折
 からに、物音人聲騷ものおとひとこゑさわがしく、「アノ人音ひとおとは縁えんの下、油斷ひやしなならざる若君わかみの、御身おんみの上も氣遣きでなり。
 ヤア、妣こしちいづ中、燭あかし々」はつと答こたへも銘々手燭、手てんで一腰長刀ひとこしなも、閃きらめき渡る縁えんの下、身は鐵てつ
 石せきの節せつ之助、寄よりくる忍しのびを人礫ひとつら、はらりくくと投げ散ちらす。物の文色あいろも暗紛くらまされ、丈拔群たけはくぐんの大鼠おほねずみ、
 口にくはへし系圖けいづの一巻、飛鳥ひてうの如く駈行かけゆくを、透とがさぬ松枝小柄まつがえこづかの手裏劍しゅりけん、鼠ねずみの頭忽かしらに、ぱつ
 と燃え立つ焰ほのほと共、すつくと立つたる異形いぎやうの姿すがた、「ア、ラ不思議ふしぎや、密ひそかに宿直しゆくちくの縁えんの下、斯かく
 取り圍くみし曲者くせものばら、騷さわぎに紛まぎれ現れしは、群ぐんに勝れし大鼠おほねずみ、正ただしく忍しのびの幻術げんじゆつなるか、ハ、
 ハ、怪あやしやナア」「此一巻このいつくわんを奪うはん爲、大願だいがん成就じやうじゆうれしやナア」と聲こゑは遙はるかに節せつ之助のすけ、「曲者待まて」
 と聲より早く、はつしと打つたる以前のこづか小柄、心得松枝まつがえしの忍しのびを楯たて、胸先血煙むなさきけり曲者くせものは、跡あとを暗くら

まし 三重出でて行く。

第七

専「サアく休めく、おらが旦那明衡殿の、人遣ひが好いと聞き、跡の季から住んで見たが、此頃の閑しさを、是では體が續かない」是「オ、それく、専内が云ふ通り、朝から晩まで働き通し、其上に京都から、上使とやら檢使とやら、今日此處へ來ると云うて、あの様に幕打廻し、饗應ぢやの御馳走のと、酒や肴で交ぜかへす、残らずあれを喰ふであろ。おいらは素口空腹で、寒晒の此尻を、明六つに御戸帳開き、夜九つに閉帳して、著のみ著の儘轉りとやるは、無便事では無いかいやい」専「コリヤ是非内が云ふ通り、中間の身の上程、打見には美々しくて、無便者の上は無し。さりながら悔むなく、此身の上にも樂しみ有り、最前幕へ運ぶ内、ちよろりと曲めたコレ此樽、三人寄つて吞まうぢやないか」是「是は出かした素早いやつ、肴などとは榮耀の沙汰」と、芝にべつたり毛だらけな、尻かたばみに押直り、指いつ指されつ、食べつ押へつ吞む程に、酒もよい程廻り口、江戸兵衛茶碗下に置き、「ア、何ぞ肴が欲しいなア、アノ幕の内こそ、肴はたと有るならん」専「ソリヤ知れた事、此専内が運ぶ内、一々蓋は取つて見ね

ど、大方中は蜆の酢和、鮪の刺身きらずの煎上、鰯こはだを魚田にし、夫から段々長じて來たら、湯豆腐などと奢るである。コリヤ江戸兵衛、我は其様な料理をば喰つた事は有るまいな」
 五「テモ扱も此奴はきつい下卑藏、喰物の事ばかり吐かし居る、忝くも此江戸兵衛、水道の水で育つた男、其様な卑劣な事は御存じ無いはい」專「コイツハ、僭上をぬかすがな、江戸は江戸でも、大方裏屋の九尺店、一つ竈に割鍋懸け、此頃は米は高し、其日々々の小買である」五「コリヤヤイ、顧の動く儘、様々と人の店探しするがな、忝くも此男の、住みし所を云つて聞かそか」專「ドレ聞かうか」五「云ふぞよ」專「聞くぞよ」五「抑此男の住みたる所は、淺草見附の邊りに於て、島屋といへる現金店、先づ其間口が五十間、奥行が五十五間、土藏作りに家を建て」
 二人「ヤア」「藤井と書きし暖簾を掛け、番頭手代子供まで、六百八十八人餘の人を遣ひ」二人「ヤア」五「某は其中で」專「番頭殿か」五「イヤ飯焚殿ぢや。本に人の行末と白水の流れ程知れぬ物は無い、江戸の者が奥州三界、わい等と付合ふも他生の縁、イヤ又江戸の繁昌が見せたいはい。先づ現金店と云ふ物はな、手代衆が二百人ばかり、抹香盛つた様にづらりと並ぶと、店に子供が立つて居て、お這入りなさいやせう、是へくく。時に女中杯來ると、お出でなされませ、今日は長閑にござります、此間の地合を最一度御覽じませ。エ、子供や、へノサ位の八丈かはり縞十

四五反持つておぢや。勘三御覽じたで御座りませう、羽左衛門もきつい評判でござります、エ
エ判取、などとやらかすは」專ハテ扱夫は賑はしさうな事ぢやな」是したが其勘三羽左衛門と
は、どのお屋敷の御家老だ」エ、コイツハ生得田舎の芋掘だ。コリヤ其勘三羽左衛門といふ
はな、日本一の歌舞妓芝居、イヤ又其繁昌が見せたいなア。役者と云ふ物がたと有つて、義
經をする時は義經、金平は金平、傾城は傾城と、それぐに分かる所が妙だは。夫をわい等に
見せたいなア」專見たいなア」是ぢやが此様な遠國に生れては、夫も一生得見ずに、仕舞うで
あろ」と雙々が、打菱るれば、エ道理々々、去ながら江戸中に生れても、屋敷方の奥女中、又
町方の奉公人、芝居を見るは一年に、漸と一度か二度、其様な人には彼聲色でたんのうさす」
專ナニ聲色とは聞かない染色だな」是エ、蒲色の事である、但は萌黄か花色か」エア、イヤ
イヤ其様な事ぢや無い、今云うた役者の聲柄をとつと其役者がそこへ出た様に似せるのぢや。
おれも江戸に居た時は、其聲色を遣ふ事が大名人、聞人が有るなら聞かしたい」と、口から出
儘の太平樂、聞いて皆々舉り寄り、「夫は何より面白から、芝居を見る事は成らずとも、せめて
其蒲色とやら聲色とやらが聞きたいなア、どうぞ一口所望ぢや」と、せがみ立てられ、今更に
知らぬとは云はれぬ時宜、高で向ふは田舎者、知らぬを當に押強う、エそんならわい等は彌々

知らぬな」二人「イヤ／＼知らぬ」正「ほんに知らぬな、知らずばさらば遣つて聞かさう。併し聲
 色遣ふには、歌が無くては成らぬが、わいら唄つてくれないか」專「ハテ歌というても在郷者」
 是「白引歌より何にも知らぬ」正「イヤ／＼聲色の歌は文句が極つて有る。ア、何とやら、オ、そ
 れそれ、雨の降る夜は一入ゆかし、此文句に何なりとも、節を付けて唄つてくれ」專「そんなら
 節は何でもよいな。雨の降る夜はナ、一しほゆかし」正「東西々々、只今遣ひますが市川團十郎
 でござります。金ならたつた三百兩で、可愛い男を殺すか、ア、金が欲しいなア、二八十六で文
 付けられて、二九の十八でつい其心ちやはいなア」專「とつともうえらいもんちやはいなア、ヨ
 ウヨウ團十郎様／＼」是「ハ、團十郎は女役ぢやな、今のは大方十七八な娘に成つた所と見え
 て、可愛らしい風俗までが、思ひ遣られて面白いはい。サア／＼ま一つ所望ぢや／＼」正「今度は
 かう金平か金時の様な、強い事がよから／＼」と、請のよいのに頭に乗つて、正「強い事ならオ
 オそれ／＼、そんなら瀬川菊之丞」「こいつは又可愛らしい名ぢやが、若し菊之丞は女役ぢやな
 いか」「イヤ／＼江戸一番の敵役、丈の高さが六尺餘りで太り肉、たとへて見ようなら誰で有ら
 うぞ、オ、ソレ／＼、此國から出られた、丁度谷風と云ふ男、顔を眞赤に塗り散らし、橋懸か
 らぐわたり／＼と、イヤ聲色ばかりは面白い、ついでに身振もして見せう。おれが足を踏む

度に、そこの石を拾つて来て、今の橋でも叩いたく、「おつと合點」と專内是非内、陰を打つ役ぐわたりく、ぐわたりく、先此の如くと踏んばたかる。專是「ヨウく菊之丞様く」
「樵の木四五本小楯に取り、赤澤山の山千鳥、本尊かけたか掛千鳥、とんびはとう鳥はか
かア、變つたハレマ對面ぢやなア」と、何を云ふやらやくたいも、知らぬが佛變々が、やつち
やくくと褒めにける。江戸兵衛ハット心付き、「かうしてべらく遊んだら、また頭めが呵る
である。尻の來ぬ内サアく」と、箒かたけて銘々に、とばかは彼處へ急ぎ行く。天さかる、
鄙とはいへど風俗は、都に恥ぢぬはけし地の、歩を拾うて象潟御前、娘文字摺伴うて、乗物釣
らせしづくと、とある木蔭に立休らひ、「イヤなう文字摺、けふは御先祖秀衡様の御命日に
相當れば、定倉殿廟參の筈なれど、公用繁き中なれば、夫に代つて自が、歩路を行くも君への
恐れ、そなたを一所に伴ふも、都より上使の御入、御馳走役はそなたの夫、祝言はまだ爲ねど、
云號の千賀之助殿、餘所ながら顔も見せたし。去ながら屋敷からは餘程の道、そなたも定めて
しんどかる」「私よりは母様の、常からおひろひなされぬ道、嘸お癆れでござりませう。お使者
儲けの此床几、ちとマアお休み遊ばしませ」と、親子の中も武家は武家、堅い程尙可愛らし。
「コリヤく家來ども、暫く休息する間、乗物はそこに置き、木蔭に休んで歸りを待て。サア

文字摺もじずりと傍かたへなる、床几やすに休やすらふ程もなく、京都よりの使者ししや羽根川丹下ねがはたんひ、伊達千賀だてちがの助伴すけうて、しづ／＼と出來いでれば、夫それと見るより萩原藤治はぎはらとうぢ、二人が前に兩手を突き、「先せん以て遠路えんろの御光駕ごくわが御苦勞せんはん千萬、拙者せつしや儀は定倉さだくらが家來萩原藤治はぎはらとうぢ、憚はづかりながら一つのお願ねがひひ、先祖秀衡殿せんそひでひらどのの目鏡めがねを以て、主人定倉代々だいいくあづか預りやうちる領地りうちの内うち、今改めて明衡殿あきひらどのの支配しはい地に罷成まかりなる事、主命もくだ黙止もくししがたけれど、何なにとも拙者せつしや其の意得いえず。此儀遺恨いこんの元もととならば、終つひには兩家の不和ふわと成つて、自おのづと忠義を忘るゝ道理、今一應了簡いまいちおうれうけん有つて、御割戻おんわりもどし下されかし」と、恐れ入つてぞ願ねがひける。千「ホウ萩原の願ねがひ尤至極、定倉殿おやあきひらと親明衡おやあきひら、兩人遺恨ふにこんを差挾さしかまば、鶴喜代君つるきよぎみのお爲ためもいかど、コリヤ丹下殿たんひこのご御思案しあん有つて、御割戻おんわりもどし遣はされまいか」羽「成りませぬ、何事なにことも皆此胸みなに、サ何なんにも云はすと控ひかへてござれ。ヤイコリヤ若い者わかもの、此の領地りうちの事、主人鶴喜代ししづの指圖さしづばかりと思ふか、忝かたじけなくも梶原殿なにい、内意ないいを以て御仰おんおほせ、其方如おんおほせきの知る事ならず。上使かみに向つて過言くわごんを吐はくは、主人定倉しゆじんさだくらの云付いひつけならん。後日ごじつの崇たかりをヤ待つてをれ」と、嵩かさにかゝれば此方こなたはむつと、「鶴喜代君おほせの仰おほせと有らば、了簡ししづの付くべき品しなも有らんが、先祖秀衡武功せんそひでひらぶこうによつて、鎧先やりさきにて取つたる此國こく、他家たけの指圖さしづを請やうくる様な主人しゆじんで無い」羽「ヤア緩急くわんたいなり其願骨そのおとほね、切下きりさけてくれんず」と、切刃廻せつはませばこなたも身構みがまへ、已すでに斯かうよと見えければ、象潟中きさかたなかへ分け入つて、「マア／＼お待ち下されませ。自みづからは定倉が妻象潟きさかたと申す者、

最前よりの家來が不禮、御立腹は御尤、慮外の段は幾重にも御了簡下さらば、忝う存じます。イヤなう藤治、御主人様より我夫に、數代預る領分なれども、他家へ上ぐるといふではなし、同家中の明衡様、殊に内縁有る家へ、お預けなさるを其様に、マ何を爭ふ事が有る。御覽じませ、田舎武士と申す者は、面々が勝手ばかり、モ必ずお氣に障へられて下りますなえ。コリヤ其方は此様子、定倉殿へ早く申せ、イヤサコリヤ何事も此胸に、ナ合點がいたか、サア／＼早う」に是非なくも、主命何と詞さへ、無念を堪へ立歸る。跡打見やり、羽イヤ何象潟殿とやら、其元は定倉の奥方とな、領分の狹められ、嘸無念にござらうが、主命なれば是非ない事と、早く諦めさつしやるがよい。ヤコレ千賀之助殿、其元親父預り地の外、十分の棒杭打たせ、嘸大慶にござらうの。モ誰しもかやうの目出たい事、あやかる爲に幕の内、お盃を頂戴致さう。ヤコレサ、モ兎角のいらへもさつしやれぬは、どうでござる、サ其元の御利分に成る事、刑部殿の差圖なれども、一つは拙者の働を以て、サかやうに事を取計らふも、此國に澤山ある、カノ、エ、金花咲く陸奥の、な金花咲く御馳走に預らんと參つたに、不興の體は心得ず、ガ但しは使者を侮るのか」と、氣相變れば象潟は、上使の前に差寄つて、「お氣放じにお茶一つ、召上られて下さりませ」「イヤ其元の馳走は請けぬ、かつふつ構ひ召さるゝな。ガ心得ぬは千賀之助、餘

いは若わい同どう士し、ガ象さう潟がた殿どのには御ご案あん内ない」「然さらば左さ様やう、斯さうお入いり」と、塗まり廻まわしたる追つ従しやうも、深ふかき心こころの奥おく方がたは、伴ともひ幕まくへ入いりにけり。千賀せんが之助のすけは默もく然ねんと、思し案あん取とりぐ後うしろには、心こころもだく文ぶん字じ摺ずりが、「イヤ申し千賀せんが之助のすけ、お心こころ悪わるいが定ぢやうならば、御お背せ中なかでもさすりませうかえ」「オ、縁えんなればこそ深しん切せつに、問まうて下くださる忝かたじけない。ガ只こころ心得えんぬは父ちちの胸きよう中ちゆう、此頃このころはそなたの父ちち定さだ倉くら殿どのと

も中なか好よくからず、さすれば主しゅ人じんへ不ふ忠ちゆうの基もと、が但ただしは深ふかい思おも召めし有あつての事ことか、何なににもせよ、モど

うも思し案あんに落お付つかぬ」「アレまだあんな餘よ所ところ事ことに、紛まぎらす様やうな事ことばかり、云い號ごうばかりにて、いつ

呼よび迎むかへなさるゝやら、ほんに出い雲もの神かみ様さまへ、懸おけた願ねがひの驗しるしにて、思おもふ殿どの御ごへ嫁よめ入いりを、今けふ日ふよ明あ

日ひよと待まちつ月つき日ひ、短みづかい冬ふゆの一日いちにちを、千ち年ねんと思おもふ心こころ根ねを、ちつとは推す量りやうしてたべ」と、娘むすめ心こころの一ひと

筋すぢに、思おもひつ積つもりし怨うら泣な。千賀せんが之助のすけも稻いな船ふねの、いなには非ひず穂ほに出いでて、靡なく心こころの向むかふへ人ひと音おと

手てアレくあそこへ親おや仁に様さま」又また本ほんに私わたくしが心こころも知しらず、悪わるい所ところへ明あ衡へい様さま」手てかういふ猥みだらな體てい見み

せたら、直すに勘かん當たう請うくる事こと、コリヤマアどうせう」木き隠かくれも、七なな熊くまならぬ乗のり物ものへ、ちひさう成なつ

て屈かみ居ゐる。伊達だての治ち郎らう明めい衡へい、廟べう參さんの下ひか向かう道みち、幕まく際さい近ぢきんく立た止とり、「夫そなるは文ぶん字じ摺ずりならすや、京

都きやうの使し者しやは早はやお入いりか、舩ふね千賀せんが之助のすけ今けふ朝あさより此この所ところへ参まゐり居ゐる筈はず、が其その方はうは知しらずや」と、様やう子

知しつたか知しらぬのか、氣き味み悪わるさうに文ぶん字じ摺ずりが、「サア千賀せんが様さまはたつた今けふまで、私わたしと咄はなしやなどする

お方かたぢやない。さうして常つしやからお達者たつしやで、乗物のりものは大嫌だいきらひ、お屋敷やしきにやなど御座ごりませう。サ早
 うお歸かへりなされませ」と、何を云ふやらしども無なき。幕まくの内うちより羽根川はねがわ丹下たんげ、象潟さかた御前ごぜん伴ばんひ出
 で、「ヤコレハく明衡殿めいこうでん、先刻さうしやくよりお待ち申まうす、が就ついては元領分もとりやうぶんの儀ぎ、拙者なまいわい内外取とりはからひ、
 十分じふぶんの棒杭ぼうぐ打ち、漸やうじく只今休息きゅうしきの所ところ、嘸御満悦さへごまんえつでござらうの」「ヤコレハく遠路えんろと申し、御懇切ごこんせつ
 の御計ごけいらひ、身に取とつていかばかり、某もくも今朝こんてうより早速さつそく参る筈はずの所ところ、先君せんくんの廟所べうしよへ参詣さんけい、心外しんぐわい
 の不沙汰ふさた御宥免ごいうめんに預あづかりたし。が則すなはち勅千賀之助しやくせんがのすけ、御使者ごしやくしや儲たくひの其爲そのために」「ア、イヤく其儀そのぎはお構かま
 ひ御無用ごむよう、象潟殿さかたでんの御取持ごとりもちで、種々しゆくしゆく御馳走ごちそうに罷成まかりなる」「ハテナ、饗應きやうおうの役人やくにんに付置つけおく勅しやくは此場このば
 に無なく、頼たのみもせぬに横合よこあひよりの取持達とりもちだて、世よには物好ものこのな者ものも有ある物、ナウお使者しやくしや」と何處どこやら
 に毒有どくある詞聞答しききこため、「イヤ申し明衡殿めいこうでん、其お詞そのことばは誰たれにおつしやる、最前さいぜん是これに千賀之助殿せんがのすけの、病氣やまの
 體ていに見えし故ゆゑ、参まゐりかゝつた氣きの毒どくさ、お世話申せわまうすも一家いけの誼よし」「ヤア其一家氣そのいけにくはぬ、心善よ
 からぬ定倉さだくらが、娘むすめの縁えんを幸さいに、我躬わがせがれを取込とりこんで、改め給たまはる領分りやうぶんを、割返わりかへさせん其爲そのために、お使
 者しやくしやへの追從輕薄つゐしやうけいはく、其方そのほうの猿智さるぢ慧ちか、但し定倉さだくらが云付いひつけか、ア卑怯ひけふ至極しごくな追從侍つゐしやうざむらひ」「ヤア聞ききに
 くし明衡殿めいこうでん、縁談えんだんは内證事ないしやうじ、京都きやうとのお使者しやくしやもござる前まへ、聞捨ききずてには成なりりがたし。定倉さだくらが領分りやうぶんは、
 先祖せんぞの鎗先鈍やうりさきなまらぬ所ところ、表裏へうりを以もつて郡内ぐんないを貪むさぼり、掠かすめる明衡殿めいこうでん、平ひらたく云はどマア國賊こくぞく、斯かく申まうす

のが御無念ならば、お相手に成りませうか、サア御返答承はらん」と、懷刀抜きかけて、詰寄り詰寄り寄る柳腰、傍にあぶく氣遣ふ娘、明衡は高笑ひ、「ハ、、、ハテつべこべと喋つたりな、所詮女は相手にせぬ、御自慢なさるゝ御亭主に、泡を吹かせてお目に掛けん。是よりは屋敷へ歸り、不所存なる舁めを眞二つに打放し、内縁をさつぱりと、切つて仕舞へば何處からも、手を入れられん氣遣なし。イザお使者にはお先へ」と、傍に屹度目を付けて、屋敷へこそは立歸る。待つ間遲しと乗物より、飛んで出でたる千賀之助、「日頃には似ぬ父の詞、刑部貝田に荷擔して、お家を奪ふ巧みな。ヤ何にもせよ御異見を」と、駈行く氣相、兎「マアく待つた千賀之助、今明衡の詞と云ひ、若輩者の意見立、聞入れぬのみならず、却て刃にかよりなば、サお主へ忠義は何の命で、マア急く所ではないはいなう。ガ今日の爲體、明衡殿の心に一物、所存有つてか敵へ一味か、善惡分かる夫までは、千賀之助をこつちへ人質、牢興がはりの此乗物、娘の部屋へ押込めて、日の目拜まぬ座敷牢、屏風の内の轉責、夜もとつくりと寢さしはせぬ、さう心得て覺悟しや。イヤなう文字摺、假初ならぬ大事の人質、そなたに番を云付け、取辻さぬ様相興に」と、恥かしがるを手を取つて、無理に押込み「オ、ソレく、いつ駈出さうも知れぬ囚人、肌と肌とを締め合うて、用心堅固に油斷せまいぞ。オ、マアノ嬉しさうな顔

はいの。家來ども乗物遣れ」と引添うて、歸るは粹の水上や、衣川へと立歸る。

第 八

萩の上風浮氣はいやよ、しめて寢る夜はナ、下紐解いて、萩の下露わしや恥かしい。武名は國に綻びぬ、衣川の館には、泉の小治郎定倉、花麗を好まぬ奥座敷、庭は代々經るもとあらの、小萩の花の歸り咲、時を違へし人心、穩ならぬ冬の空、庭には主従三人が、手々に竹柵箒目の、落葉枯葉を取捨て、打水玉に置く露も、紛へて蟲とや見えぬらん。主定倉機嫌好く、「ヤ千賀之助、今日は其方が手傳で、思ひの外早い仕舞、嘸草臥で有らう、休息しやれ」「ハア是は痛入つたるお詞、お前様こそ嘸お勞れ、モウ何事もお構ひなく、平に御休息なされませ」と、勧めに定倉傍への床几、腰打ち掛けて烟草盆、煙管取上げ薫らす、煙に憂きを吹きはらす、花に餘念は無かりける。飛石傳ひ歩み來る、定倉の奥方象瀧御前、跡に付添ふ文字摺御寮、年も二八の振の袖、心ばへなら器量なら、京恥かしき品形、奴はしたが取りぐに、小竹筒組重數々を、床几の元へ持ち運ぶ。奥方はしとやかに、「御祕藏の花の返り咲、いつも盛りの時分と違ひ、寒氣烈しき冬の空、毎日く庭へ下り、御持病でも發つてはと、文字摺に氣を付けら

れ、九獻でも上げたいと、此子^こが手づから切り刻み、所變^{かは}れば品^{しな}とやら、お氣放^{きはな}じに酒一つ、お上りなされて下さりませ」と、會釋^{くわいじやく}こほるゝ挨拶^{あいさつ}に、「オ、氣^きが付いて心遣^{こころづか}ひ、過分^{くわふん}々々、花に心を移し居れば、鬱氣^{うつき}もせず、結句^{けつく}土^{つち}なぶりは身の養生^{やうじやう}。ナニ桐平^{きりへい}は次^{つぎ}へ起つて休息^{きゅうしやく}せい」「ナイ」と、其儘^{へま}部屋へ立つて行く。定倉^{じやうくら}は打くつろぎ、「イザ一獻」と取上ぐる、娘が酌^{しやく}に一つ請け、「此盃は千賀之助、其方^{そなた}へ指さう、一つ呑みやれ。此頃自身^{じしん}庭の掃除^{きそう}を勤むるも、秀衡公寵愛^{ちゆうあい}有りし此萩、夫故庭^{それゆゑ}を清くするも、先君^{せんくん}に仕^{つか}へる心、時ならぬ返^{かへり}咲も、お家の吉事^{きちじ}を告ぐるならん。此もとあらの木萩^{きはぎ}に寄せ詠^よみたる歌は、ア、何とやら、娘そちや覺^{おぼ}えずや」「アイ、成程^{なるほど}其歌は、秋萩^{あきはぎ}の古枝^{ふるえ}に咲ける花見れば、元の心は忘れざりけり」「オ、いかにも、ある人萩^{はぎ}は一年づつにして枯^かれ、若葉^{わかは}より花咲くを、古枝^{ふるえ}に咲けると詠^よみしはと難^{なん}ず。此萩草花^{さきくわ}にあらず、木なり、一名^{いちめい}を唐萩^{からはぎ}といふ、依^よて弓^{ゆみ}などに是^{これ}を作る。武勇^{ぶゆう}に長^{ちやう}ぜし秀衡公^{ひでひらうこう}、寵愛^{ちゆうあい}ありしも尤々^{もつとも}、花の色^{いろ}も異木^{ことぎ}に勝^{まさ}り、餘國^{よこく}に雙^{なら}ぶ方^{かた}なき名木^{めいぼく}、先君御祕藏^{せんくんごひさう}の此木萩^{このきはぎ}、一年に二度の樂^{たの}しみ、去年^{こぞ}と今年^{ことし}を秋^{あき}と冬^{ふゆ}、ハテ面白^{おもしろ}の眺^{ながめ}や」と、汲^くみかはしたる盃^{さき}の、數々^{かずかず}廻^{めぐ}る年毎^{としごと}に、斯くぞ有りたき風情^{ふぜい}なり。父の機嫌^{きげん}に文字摺^{なな}が、何か願^{ねが}ひの有顔^{ありがは}を、見て取る母^{はは}が、「コレ文字摺^{なな}、父上^{おとうさま}へ今の事^{こと}、ちやつと」と教^{おし}へられ、面映^{おもは}ゆけに手をつかへ、「徒^{いたづら}者^{もの}と思召^{おもほしめ}すも恥

しけれども、云號の千賀之助様、一つ屋敷に居ながらも、まだ祝言もせぬ殿御、父上のお情で、どうぞ今宵夫婦の盃、お許しなされて下さりませ」と、父には願ひ夫には、聞けくがしも戀の風、胸の結ほれもつれ糸、只一筋の願ひなり。「ホ、尤なる願ひなれども、其盃は追つての事、と云ふ其子細は、明衡が此頃の行跡、刑部貝田に合體せしか、先つ頃より不和の中、彼が心底さぐり見て、惡説に極まらば、其時こそ改めて、明衡方へそちが興入、若し又惡事に組せしならば、言ふまでもなく、叶はぬ縁と諦めよ」と、聞いてがつくり文字摺が、いつ果しなき盃の、延びる思ひの遺瀨なさ、涙隙なき有様に、母象潟が引取つて、「此頃上使儲の時、明衡様の御機嫌損じ、夫故自が伴うて、此館に置く千賀之助殿、折を見合せ、説言は自が心に有る。其上父御が明衡様にお逢ひなされたら、祝言もつい出来る、必ずきなく思やんな。此國にて明衡定倉といへば羽翼の臣、代々忠義を忘れぬ家、明衡様に限り、よもやさう言ふお心の」「イヤ奥、さうで無い、水は方圓の器に隨ふ、油斷ならざる此時節、移り易きは人心」と、詞の中に千賀之助、定倉が傍に差寄つて、「父明衡が胸中は、定倉様こそ能く御存し、主君を忘れ非道に組し、同天は戴かす去ながら、如何なる天魔が見入にて、逆徒の氣ざしも候はど、一家同友の御誼、御諫言なし下さらば、生々世々の御厚恩」と、涙と共に願ひける。「ホ、切なる願

尤々、併し儀に依つて一命は塵芥よりも猶輕し、君父に仕へる千賀之助、若し又明衡君に弓引く心有らば」千ハ、ア仰までも候はず、君の爲國の爲、父明衡を打つて捨て、腹かつさばき父諸共、冥途の魁」「ヤレ其詞が武士の誓言、ハテ逞しや健氣や」と、流石血筋の縁に連れ、千賀之助が心の中、思ひやつたる目に涙、見合す顔の一瞬、花も萎るゝばかりなり。折柄下部が手をつかへ、「錦戸鷺五郎様御入なり」と知らすれば、「ハテ心得ぬ、刑部が盼當國へ來りしとは、何にもせよ是へ通せ。象潟、娘も、次へ立ちやれ」と追立てやり、衣紋繕ひ待つ間、程なく來る錦戸鷺五郎、都育と名にも似ぬ、節くれ立ちし角前髪、疊障りも荒けなく、さも横平なる頬構、上座にどつと押直れば、定倉は威儀繕ひ、「ホ、珍らしや五郎殿、先以て遠路の所御苦勞千萬、御用の趣承はらん」と手を付けは、「サレバく、拙者遙々と參る事餘の儀にあらず、當時都には奸佞の者多く、やゝともすれば主君を害し、家國を押領せんと企、愚父を始め貝田某、日夜を別たす寢食を忘れ、さるによつて間者を入れ聞きたる所、其逆徒の張本といふは當國に在りと、事明白たるによつて、貴殿と某申し合せ、國賊どもを搦捕り、一々に首を並べ、國家の歎きを鎮めん爲、夜を日に續いで參つたり」「コレハく存じも寄シぬ大變、承つて驚き入る。シテ其反逆人とは何者でござるな」「サレバサ、其逆徒といふは、貴殿と縁有る

伊達の治郎明衡さ、承れば梶原殿の御意と偽り、貴殿の領地へ棒杭打たす、是などが倭人原と馴合つて、定倉殿、貴殿に一揆起させ、儕等が館へ引寄せ、手を出さずして討取る術、ナサ御合點が参つたか」と、同士討さする底巧。千賀之助つツと出で、「ヤア聞きにくし驚五郎、棒杭は君よりの御差圖、父明衡か反逆とは、慥な證據跡有つての事か」「ハ、、、、同じ穴の子狐め、化の皮が顯はれかゝるで、悶くはく。此驚五郎を誰とか思ふ、當時肩を並ぶる者も無き、錦戸刑部が二番生、女童が使の様に、イヤサア其證據は杯と、口を閉ぢて歸らうか、アノ爰な大馬鹿者が、汝ごときの生白けたしやツ頬で知る事でない、顔をたゝかすと、其方らの方へ片寄つて、ちよくこなつてござい。イヤ定倉殿、貴公へ見する物有り」と、懷中より一通を取り出し、「此一書披見召され」「ム、松枝節之助殿、伊達明衡、ハテいぶかし」と肩に皺、開き見るより恟りし、「明衡妹政岡と心を合せ、鶴喜代君を毒殺に及ぶべし、定倉事は、某存する旨有れば、宜しく事を計らはん。コリヤ是れ明衡自筆の狀、ホイ」「何と御覽じたか、身動きならぬ此一通、ちよつと小口がこんな物さ、逆も通れぬ明衡親子、可愛や命が宿腐つたか、ヤモ頬を見るも穢らはしい」と、飽くまで惡言嘲哂に、たまりかねて千賀之助、腹に据ゑかね、「ヤア詞が過ぎる、察する所汝等親子、貝田勘解由が巧にて、父を科に落さん爲な、我が推量

に違ひはせじ、イデ逆徒原一々に面白ません」と立上れば、「ヤア何處へく、案外なる素野郎め、某親子を反逆とは、圖ない事を卷出したな。其はしやいだ頭骨を、切り下けてくれんず」と、鐔打鳴らしつつ立てば、「オ、さう言ふうぬを」と鯉口くつろけ、詰寄り詰め寄る血氣と勇氣、既に斯うよと見えたりける。定倉押しとめ、「五郎殿お控へなされ、千賀之助も控へてをれ。明衡が明白の上は、君の上意を頭に戴き、討取るに何の手間隙、今兩人刃傷に及び、此事世上に流布有らば、國の騒ぎ大方ならず、事落居するまでは、千賀之助は此方へ人質、最早籠中の鳥同然。五郎殿には大切なる討手の役目、何事もお構ひなく、奥の一間で御休息、御酒一獻召上られよ」「コレハく、某も長途の勞れ、然らば奥にて御馳走に預らん。コリヤ千賀之助、此世に居るも暫しが中、頼寺へ人でも遣り、似合うた様に念佛でも唱へて待つて居れ。ヤ定倉殿御案内」と、欲惡不道の犬侍、力み詰寄る千賀之助、押へる定倉鷲五郎、打連れ一間へ入りにけり。風かあらぬか萩の本、そよと物音忍びの姿、邊を窺ひく足、出合頭に梶平が、見るとも知らず曲者は、奥を指して駈入るを、「ヤア忍び入るは何者ぢや」と、聲掛けられ、振返つて物をも云はず、切つて懸るをかい潜り、刀手繰つて擔投、拍子に落つる一通を、疾くより後に定倉が、拾ひ取る間に梶平が、何の苦も無く曲者を、縛し上げ

てぞ引据ゑたり。定倉封じ押開き、「何々、其方今日屋敷へ忍び入り、小治郎定倉討取りなば、當座の褒美として、金子三百兩遣すもの也、猶恩賞は功に依るべし、伊達の治郎明衡判ム、さすれば彌々彼が悪心、根深くも巧んだりな。出かした榎平、下郎に似合はぬうい奴うい奴、今日より後日末長く、武士に取立て遣つてくれん」「ハツ／＼有難く存じ奉る、此上ながら何時々々までも、お目掛けられて下されうなら、忝う存じ申すでごはりまうする」と、悦び勇む折こそ有れ、「明衡様御出」「ハテ合點の行かぬ、斯くも仕込みし今日の時宜、此頃不和なる我屋敷へ、明衡來るは子細ぞ有らん。榎平、曲者取遁すな」と引立てさせ、座席を改め待ち居たる。早程もなく、伊達の治郎明衡、家に杖突く年ばいや、腰に梓の弓取の、張と意地との岩疊作、袴のひだも角菱有る、不和なる中の中敷居、目禮ばかりつと通る。定倉も一揖し、「珍らしと明衡殿、いつぞやより何となく、中絶致せし某が屋敷、思ひ寄らぬ只今の入來、サ子細ぞ有らん」「ホ、成程、伊達泉の當家は、誠に車の兩輪の如く、何れを何れと甲乙なく、國の政事を預る當人、水魚の如く有るべきを、何故に忍びを入れ、某を討たんとは謀りしぞや。證據は忍びが所持の一通、貴殿よりの頼の狀、コレ見られよ」と投出す。定倉取上げ打まもり、「ハ、ハ、ハ、ハ、年老いぬれば麒麟も驚馬、流石に名を得し明衡も、刃金が棟へ廻りし

な、其方の巧を仕損じ、詮方なさの破れ口、先づ其方から白狀なされ」「ヤア舌長し小治郎定倉、某に白狀とは、ナ、何を以て」「アイヤ鶴喜代君を亡き者にせんと、種々の巧を我能く知る。最前召捕る曲者が、懷中の狀の文體、人知れず定倉を害せん巧の證據の一通、披見せよ」と以前の狀、差出せばとつくと見、「ハテ巧んだり拵へたり、似筆を以て某を、謀らんとは愚、遺恨有らは武士らしう、名乗掛けてなぜ勝負はせぬ。腰拔侍を相手とするは、刀の穢と思へども、イザ立上つて勝負々々」「ホ、何事も露顯すれば、所詮叶はぬ死物狂ひ、狂人同然の明衡なれども、望に任せイザ勝負」サアくくくくと互に鯉口、ちつとも赦さぬ氣配り目配り、とくより此方に立聞く象潟、心を冷す氷の刃、一度にきらめく電光石火、かつしと合うたる刃先と刃先、胸の鎬はこほるゝ如く、勇士と勇士の一世の晴業、綱ひらりと白刃の刃、「マアマア待つた定倉殿、明衡様もマア待つて」と、我身をしづにどつさりと、二人も尻居にどつかと坐し、「ヤア武士と武士の争ひを、女童の知る事ならず」「オ、サ奥方留立して、怪我召さるゝな」と引取る刀、「マアくまあ云ふ事を聞いてたべ、女童とおつしやれども、先程からのお二人の争ひ、互に證據は有りながら、夫と分らぬ其内に、打果しなされては、兩家共に滅亡し、先祖へ對して御不孝と云ひ、主君へは不忠不義、とつくりと御思案」と、詞立派に武

家育、合す刃に打つ非太刀、流石泉が妻なりし。二人も顔を見合して、定ム、實にもく、負
 うた子に教へられ、淺瀬を渡ると譬の如く、今兩人が打果せば、家の斷絶先祖へ不孝、但し汝が
 巧の次第、急度詮議するまでは、傍を放れぬ定倉」と、納むる刀明衡が、膝元へ投出せば、此
 方も同じく刀を鞘。明「ホ、明衡が魂も定倉に付添うて、汝が底意白狀まで、互に離れぬ詮議
 役」定オ、明衡が魂は定倉が急度張番「明定倉が魂は明衡が急度糺明」定後程迄に「明サ仕
 上を見よ」と、詞の切刃詮議の鏑際、國に目貫の兩家老、別るゝ一問象潟も、暫し休まる胸の
 中、連れて奥へと入りにける。様子伺ひ驚五郎、出づる庭先差足拔足、傍を見廻し以前の忍び、
 共に木蔭を奴の柵平、「驚五郎様」「シイ聲が高い、親刑部殿の計ひにて、伊達泉兩人を同士討
 させんと、忍びの計略圖をはづさず、爰までは仕果せたが」「成程々々、疾くより入込む此の柵
 平、又國に残る一味の面々、彌々二心なき血判、コレ此一巻に」と差出せば、「ホ、出かした
 く、此連判を明衡定倉に見付けられては事むつかし。コリヤ汝は是を親人へ、右の様子物語
 れ、必ず人に見咎められな、早くく」に曲者は、肌にしつかと納むる一巻、「然らば拙者は是
 より直」「オ、サく、早急け。ナニ柵平は跡に残り、某諸共何かの手番ひ、早行け」と、奥と表
 へ別れ行く。隔つ親子の仕切の襖、明けても明かぬ明衡が、跡に附添ふ千賀之助、父が前に差

寄つて、「先程より申す如く、貝田と縁有る親人故、主君に背く氣さし有りと、證據を以て鷲五郎が、定倉殿へ讒言は、却て彼等親子が巧、親人と定倉殿、互に疑念を生ぜさせ、一虎潰えに乗ぜん爲、とは思へども日頃に變り、利欲に迷ひし境論、何角の様子思ひ合せば、若しや誠の不忠にやと、現在血筋の某さへ、疑ふ心の出づる物、今區々の人心、他人の疑尤も至極、お心を打明けて、定倉殿と心を合せ、お家に逆ふ惡人原、一々に糺明し、忠臣の名を上げてたべ」と、詞を盡し利を盡し、孝と忠との一筋に、涙はちすぢの誠なる。明衡は返答なく、諸手を組んだるこたなの一間、障子開いて小治郎定倉、「ナニ文字摺、最前よりそちが願ひは、勘當をしてくれいとな、女の身に似合はぬ望、サ様子は何と」と尋ねられ、涙ながらに顔を上げ、「姫ごぜの身の有られぬお願ひ、嘸や憎しと思召す、不孝の罪も辨へぬは、親とくとの云約束、祝言せねど殿御ぢやと、樂しんで居る物を、思はぬ今日の爭故、夫婦の縁も是切に、成つたら私や何とせう、どうせう、どうしやうぞいなく。思ひ切られぬ胸の内、いつそ勘當請けたなら、不和な中でも武士の、義理も意氣地も有るまいと、無理な思案も千賀様に添ひたいばかりの私が願ひ、人と思召されずと、犬畜生と思し切り、願ひを叶へて給はれ」と、おほこ育ちのあやもなく、譯もなみだにくれ居たる。千賀之助は父の顔、やゝ打寄り恨めしけに、「いか程

に申しても、御返答も成されぬは、お心に一物有るか、忠義には親をも討つ、誠お家に仇ならば、親子の縁をさつぱりと、お切りなされて下されい。不孝には似たれども、不所存なる父上と、一つで無い主君へ言譯、先祖への我忠義、サアさつぱりと勘當との、お詞願ひ奉る」と、口には云へど心には、子として親へ不孝の惡口、勿體なや恐ろしやと、胸へ急きくる血の涙、押へかねたる風情なり。治郎明衡聲あらよけ、「ヤア若輩者の云はれぬ諫言、親に勘當してくれとは、他人と成つて某に、またも諫を入れん爲か、但し云號の文字摺に、心迷うて其願ひか、何にもせよ親に向ひ、慮外は我に弓引く同然、幸かざる此弓矢、目當的は襖の繪、雪持松の下り杖、一矢に射當てば望の通り、勘當をしてくれん」と、投出す弓矢定倉も、「ヤイ文字摺、一旦組んだる夫婦の縁、親に換ゆるは女の操、とは云ひながら只一人の我血筋、捨てるか捨てぬは正八幡の、教へに任す此弓矢、的は襖の松の枝、射當てばそちが望みの勘當、早くく」と親々が、互に詞かはらぬ願ひ、はつと一度に取上ぐる、親子別れを爭ふ一矢、弓天神の冥慮にも、盡果てたるか悲しやと、思へば共に手も震ひ、目當もくるひ引しほる、弓弦を傳ふ露涙、覗ひ固めて文字摺が、放す手の内はづると矢先、鋭き羽ひどき千賀之助、目當違はぬ松の杖、射當つる矢先我胸も、碎くるばかり親と子の、縁の切目と思ふにぞ、弓投捨てようとうと坐し、

暫し詞も無かりける。明衡は勇みの顔色、「勝負の一矢に射勝ちし上は、京都へ赴く伊達明衡、勘當せし千賀之助、行末頼む小治郎殿」と、詞に文字摺千賀之助、思ひがけなく驚く二人、「ホホ年月の本望達し、嚙御満足察し入る、改め云ふには及ばねども、刑部を始め貝田直衛、徒黨を拵へ、鶴喜代君を害せんとする此時節、貴殿某兩人の内、京都へ立越え台朝に達し、事を糺さんと思へども、今諸士の別當たる、梶原平三景時は、錦戸刑部に内縁あれば、此度の決談は、地獄の上の一足飛、生きては歸らぬ此役儀、勤むべき貴殿と某、互に忠義を爭ひしが、死ぬるも跡に留るも、忠義の決著せん爲に、躬どもが弓矢の勝負、射勝ちし方が都へ出立、命を的の對決も、星をはづさぬ忠臣は、武運に叶ひし明衡殿、ホ、お羨しう存する」と、詞に明衡莞爾と打笑み、「貴殿と某兩人が、心を堅むる事を知らば、敵心を赦さずして、短兵急に我君を、殺害せんも計られず、敵よりの術に乗り、不和なる體に成したるも、事を延する互の計略、最前取交したる一腰は、死ぬるも生くるも兩人が、忠義を一つにせん計略、又邪智深き鷲五郎、彌彌不和に見せかけて、事の様子を刑部貝田へ告知らせんと我計らひ、武士の身の上は、人界へ生るより、君に捧ける身體髮膚、時日に移さず都に登り、佞人原をことごとく、罪を糺して立歸らん。さりながら、老少不定の世の習ひ、父が顔をも能く見置き、都へ登りし其跡は、

定倉殿を親と頼み、萬事の差圖に隨ひて、文字摺と中好く添ひ、子孫の榮を忘るゝな。又母とも無い千賀之助、御不便頼むぞ治郎殿」と、忠義に撓まぬ武士も、流石恩愛捨てがたき、身節に徹へる千賀之助、文字摺も正體なく、歎けば共に定倉も、親子の心思ひやり、忍び涙にくれ居たる。襖くわらりと錦戸五郎、「ヤア始終の様子とつくと聞く、此上は汝等が、息の根留めん」と懷中より、取出す鐵丸庭の面、投ぐると其まゝ燃え立つ狼煙、俱に盛の萩の花、一度に散つて散亂せり。合圖に斷來る以前の曲者、庭先に突つ立つたり。五郎聲かけ、「狼煙を合圖に味方の軍兵、取懸けたる何とく」「されば候ふ術の如く、狼煙を合圖に寄掛けんと、待ちに待つたる刑部が軍兵、定倉殿の下知によつて、こなたに仕かけし焙烙火矢、切つて放せば一騎も残らず、微塵に碎けて皆殺し、此上は其方一人、最早最期に間はない、尋常に觀念せよ。汝が忍びと頼みし我は、熊川源五兵衛秀景、逆意一味の連判狀、最前我手に入りし上は、親子諸共逆磔、覺悟々々」と呼はつたり。「ヤア扱は儕は熊川よな、斯くまで仕込みし我大望、汝ら如きが術に乗り、裏かゝれしか殘念やナア。せめてもの腹癢せに某が豫て、仕掛けし地雷火にて、俱に冥途の供させん、覺悟ひろけ」と云はせも立てず、「ヤア愚々、地中に陽氣有る故に、時ならぬ萩の返り咲、正しく敵の巧にて、地雷の仕掛と測り知り、熊川に云含め、衣川の

水上を堰き入れたる故にこそ、地中に籠りし陽氣を失ひ、アレ見よ花は枯れ萎む。草木心無しと申せども、お家の凶事を告知らしむ、凡人ならぬ秀衡公の、惠の程の有り難さ。先君御寵愛のこの名木、今より後は此萩を、先代萩と名付くべし」と、詞に實も大國の、花も實も有る宮城野に、今も其名は世に高し。鷺五郎は死物狂ひ、定倉目がけ切付くるを、かい潜つてもぎ取る刀、其儘はつしと首打ち落し、「鷺五郎を討取る上は、兩家の疑念も晴れ渡る、此上は二人の子供、婚禮を取結ばん。ヤアく象潟、取り敢へず銚子々々」「アイ」といらへて象潟御前、心ばかりの祝儀のまなび、三方土器取持つて、二人が前に並ぶれば、明衡頭打振つて、「源五兵衛の忠節にて、慥の證跡出る上は、晝夜を分かす都へ登り、悪人原を取拉がん。盼ごときの小事に拘はり、暫時の延引暫時の不忠、早お暇」と立出づる。定倉暫しと押止め、「忠臣一途の御老人、早逸り給ふは理ながら、過半刑部に一味の中、御身一人參會有る事、氣遣ふ儀には有らねども、恐るゝに徳有りとかや、必々油斷なく」「オ、尤なる御示、錦戸刑部は取るに足らず、貝田直勝梶原が、威勢を假りて忠節を、覆ひ隠す術ありとも、我亦義心を表に立て、誠を以て押す時んば、神國の奇特などや無けん。若しや彼地に變有らば、若君を竊に守護し、間道より馳歸らん事、十日の外は出づまじきぞ。其間の籠城を、堅固に頼む定倉殿」「ホ、其儀はちつとも

氣遣ひ有るな、本城に楯籠り、種々の計略諸卒を勵まし、寄せ来る敵を追立てく、暫時も足は留めさせじ」千オ、潔き御詞、千賀之助も其時は、一方を賜はつて、破竹の如き堅陣なりとも、義を金鐵に切つて入り、井の字巴の字に薙ぎ立てく、野白に成つたる敵兵ども、追詰め追詰め追散し、武術の程を試みん」熊ホ、勇ましよく、此熊川も楯籠らば、敵の首をば二三三百、數珠繋ぎにしてくれん物、近頃残念さりながら、寄手に武功の者有つて、思ひがけなく城外に、勢を伏せ置き不意を討たば」千オ、夫こそは傳へ聞く、野に伏勢有る時は、歸雁連を亂すとかや、まつ此通り」と松が枝に、打込む手裏劍榑平が、眞逆様に無殘の最期。「オ、天晴々々、手の内と云ひ智謀の程、末頼もしき千賀之助、心置なくはや出立」「ホ、然らばお暇」再會は、頼みがたなき夢の世や、思ひ數書く文字摺が、「切めて一日宮仕へ」泣いて見送る象潟が、互の心思ひ遣り、こぼるゝ涙押包む、「忠義の誠を顯す時節、かゝる目出度き出立に、涙は不吉」と聲張り上げ、「兵者の交り、頼有る中の酒宴かなハ、」「ハ、」「二ハ、ハ、ハ、ハ、」笑ふは武士の別の涙、忠臣なりける三重。

第九

「サア、何となく」「主人鶴喜代幼少にて家督相續仕るに付き、信天庄司、錦戸刑部、兩人後見仰付けられしを、國本の老臣ども、不快に存じ罷在る上、某儀京都府に極められ、家中の仕置仕るゆゑ、高木風に憎まるゝの譬、信夫の庄司病死以後、錦戸刑部と私二人、政事專に取計らひ罷在るゆゑ、爾餘の輩その誤有らん事を心掛け、越度有らんにのみ目を付け、耳を傾け伺はゞ、數年の間、何ぞ一兩度の誤無き事や有らん。勿論毒殺に及び、家を奪はんと一味徒黨を催せしなど、ゆめく覺悟仕らぬ儀、然る所僥忽の訴、コリヤ偏執邪推、憚りながら此儀御賢察下さるべし。聊左様の企せん事、天の冥罰恐ろし」と、辯舌巧に述べければ、梶原顔色快然と、「貝田勘解由が申す條、一々に理に當れり、ア、明衡最良の人有らば、嘸赤面を致されん、ハ、ハ、ハ、ハ」と嘲弄に、梶原殿の詞とも覺えず、忝くも公の政道を承り、理非明白を決斷し、親疎依怙最良に拘はらざるを面々職分の心得、邪を糺す役人として、身に邪を行ひ、或は時の權威に誇りて、己に諂ふ者を助け、疎き者を罪に落す、若しも左様の者有らば、是ぞ誠の大罪人、誰にもせよ、どなたにも有れ、急ぎ召取り首討つて、獄門の木に曝すこと、政道の本意ならん」と、諂ひ飾らぬ其勇氣、凛々たるに肝拉がれ、「成程々々、左様々々、重忠殿には氣象人、尤も至極に存する」と、座興の體に紛らせば、明衡謹しんで頭を下け、「貝田勘

解由が逆罪の儀は、先達て訴へ奉る通り、當鶴喜代に限らず、一凡そ十ヶ年以來の存じ立て、其故は、若き主人は常々に諫言を加へてさへ、我儘さし起り申す事なるに、反つて近習の者どもに申し含め、頻りに姪酒を勧め、奇妙院と申すを頼み、下駄に呪咀の文を書かせ、益々放埒に本心を取亂させるの類ひ、擧げて數へるに暇なし。仰ぎ願はくは、台命の憐愍なし下され、御糺明願ひ奉る」と、恐れ入つて訴へれば、梶原聲かけ、「コリヤ、勘解由、明衡が申す所、一に相違無きや、其方が返答に依つて存する旨有り、定めて覺悟有る事ならん」と、心を付くれば貝田はひれ伏し、「冠者太郎の近臣の内、不身持知らず者有るゆゑ、刑部私申し合せ、度度諫言仕る節は、毎度異議なく得心致し、私など出席の砌は酒宴遊興の沙汰嘗て無く、後々に承れば、法外なる事ども御座有るよし、據なく國本へ申し遣し、一門ども罷上り、義綱を隠居致させしは、老臣ども皆承知の所、私一人の所爲と申し出づる明衡が所存心得がたし」「コリヤコリヤ貝田暫く待て、汝事を左右に寄せ、云譯立つると思へども、爾餘の儀は未だ知らず、最前より廿餘ヶ條、悉く其方が罪、其職に居て其事を怠るは大罪に有らざるや」「ハ、御意恐れ入り奉る、しかし過分の役儀に付き、用事繁多に相勤め罷り在れば、義綱の放埒惰弱、晝夜傍に是れなき故、存せぬ事は力及ばず」「ヤア詞多し貝田直勝、汝富樓那の辯を振ひ、役人ど

もを云ひ掠めんと思ふや、譬へば其方、主人の家に大切な重寶有つて、汝が方へ預る時、盜賊の爲に奪ひ取られ、イヤ某は存じ申さず、盜賊の業なりと、油斷の云譯立つべきか。サ其方何と心得居る、若き主人を預る事、器財の類の輕きにあらす、往古周公旦成王を補佐し給ひ、清和の朝に良房の趣、人臣たる者の鑑たり。義綱の心亂れ、行跡正しからざるは、預人の罪誰にか譲らん、返答いかに直勝」と、水を流せる詞の楯板、暗きを照す明察は、實日本の固めなり。貝田は猶も進み出で、「ハ、御意恐多く候へども、暫くお扣へ下さるべし、明衡に答ふべき儀有り、家の大事を訴ふるに、御身一人引請け、爾餘の面々は一向知らざる體、是れ不審の第一なり。謀書を作り佞人を集め、某を無實の罪に沈めんと計るは、如何なる遺恨有つての儀なるや、是れ不審の二つなり。又諸士の面々何心も無きに、汝一人詞を企て、台聽に達し奉る事、是不審の第三つなり。言譯有りや明衡」と、居長高に詰めかくれば、こなたも膝を立て直し、「汝辯を巧にして専らに非を飾れど、何ぞ明衡を云ひ掠めんや。某一人事を預るは、深き意味有る所にて、其方如きが知る事ならず」と、云ひも果てぬに梶原聲かけ、「ヤイ、明衡、そりや暗い、只今貝田が尋ぬるに、一つとして返答に及ばず、意味有る事と後日に延し、我方に理有る事を只今急に云ひ立つるは、コリヤ是れ汝身勝手過ぎる、貝田一人に申すと心得しか、

忝くも決斷所に於て、諸役人を蔑にしたる申分、甚以て奇怪なり」と、氣色損じて見えければ、「ハア、御意恐入り奉る、併ながら、國本の面々一列に申上ぐべき事なれども、一味徒黨の後難を恐れ、私一人事を預り申上げ奉る、近年國本へ申遣す仕置等、道ならぬ事ども少からず、心得がたく存すれども、何時の下知、何れの指圖にも、梶原様の仰、景時様の御内意と申越さざるは是なく、當時一天下の間に於て、梶原様の御意と有れば、迅雷の如く恐入り奉る儀、刑部貝田の非道を訴へ申す時は、憚ながら梶原様の貴命を背くに相似たり、さるに依て」「コリヤ、明衡、委細の様子詳かなりさりながら、梶原殿に限り、左様の非道有らん様なし。殊に景時殿は専ら歌人の聞え有り、正直の心を種とする詠歌、ナその歌詠の梶原殿、よも邪に組し給はん、但し覺ばし御座有るや」「何のく、左様の事予が知る所に有らんや。定めて夫は佞人どもが、此梶原が威勢を借り、諸人を靡かす謀事、某は存ぜぬ事」「左様なくては叶はぬ所、コリヤコレ刑部貝田が巧ならん、明白に白狀せよ」「ハア御意恐入り奉る、併ながら我々が謀計とは、何を以ての御仰」「オ、其證人は是に在り」と、貴人高位の恐れもなく、明衡が前にむすどと坐す。「ム、珍らしと浮世渡平、シテ其方が證人とは、こりや明衡と云合せ、某を罪に落さん巧ならん。忝くも御大名の方々、歴々御座の其中へ、其方如きの

出席は、上へ對して恐れ有り、且鶴喜代が後難ともならん、其處立去れ」と白眼付くる。ちつとも臆せず、くつくと吹き出し、「今に變らぬ立派の口上、併し某出るからは、大言の吐く其顚骨、追付け踏み裂いてくれんす」と、事も無けなる一言に、「緩怠なり浮世渡平、某が工みとは、何ぞ慥な證據有りや」「ヤア盗人たけぐしいと俗語の如く、其争ひも今の内、某疾くより入込みしを、熊川とも源五とも得知らぬ空氣ども、隙を窺ひ奪取りし此一巻に、汝を始め一家中も、大半は刑部に一味の連判狀、最早通るゝ方はなし、夫へ參つて繩掛けようか、但し言譯の筋有るか」「サア夫は」「サアくくくくどうぢや」と、退引ならぬ證據に、指しもの貝田口ごもり、返答しどろに控へ居る。庄司重忠威儀繕ひ、「ナニ梶原殿、是にて事は落著せり。去ながら、證據と成るべき其の一巻、改めずんば叶ふまじ。赦す、是に持參せよ」ハツと明衡頓首して、御前へ差出せば、「景時殿、イザ御披見」「イヤサク、何の是しき見るに及ばず、其儘に捨て置かれよ」「イ、ヤイヤ左にあらず、鶴喜代一家の納りは、此一巻の中に在り、佞人どもに咄し欺かされ、梶原殿も一味なされ、其元の御姓名、此中に在らん事を、恐れて披見なされぬか」「サア夫は」「よもや左様な事有るまじ」梶然らば一所に見ませう」と、兩人立合ひ紐とくく、貝田は一生懸命と、面色は彌土の如く、明衡熊川兩人の、腕の曇りを

吹き拂ふ、冷風さつと押開く、中には一字一點なく、重忠は唯不審顔、景時怒りの聲荒らけ、

「汝等兩人此所を遊所遊山の座席と思ふや、忝くも京都の決斷、事を猥に取計らひ、白紙を以て

證跡とは、上を恐れぬ大罪人、謀書を拵へ詞を巧み、貝田を科に落さん爲、明衡一人の所存に

あらず、皆鶴喜代の指圖ならん、覺悟せよ汝等」と、一卷取つて投げ付くれば、兩人驚き立寄

つて、披き見れば、「コリヤ白紙、明衡殿」「源五兵衛」「二人ハア」○間毎々々の結構は、實にも

執事の奥座敷、上段の間に座をしめて、テレイヤカン、インテレイヒ、コウイヤカン、デビイル

ヒイルと、唱ふる仙家の祕密文、鼎に注ぐ潔淨水、棘の黒髪振亂し、天に向つて渴仰し、「明衡

貝田が對決に、落著すべき彼の一卷、唐土廬江の水を取つて、是なる鼎の中に湛へ、洗ひ落し

て白紙となせしも、奥羽二國を覆し、先祖國香の修羅の妄執、散ぜん事は今此時、アラく心

地やや嬉しや」と、襖に響くうなり聲、疾くより窺ふ外記左衛門、覗ひ寄つて眞二つと、打込

む刀曲者は、又も唱ふる祕文につれ、次第々々に手もすくみ、思はず知らず取直し、我と我手

に數ヶ所の疵、夢の直路の如くにて、よろほふ足を踏みしめく、爰ぞと切込む刀は反り、眞

額二つに血は滴り、鼎の中へ入るより早く、陰陽激して忽ちに、逆巻く水氣燃え立つ炎、折よ

く松枝節之助、さしにも重き大鼎、片手に差上げ指し付くれば、血汐の穢嫌ふと見え、背ける

曲者早足の松枝、姿に影の添ふ如く、ぢり／＼と付け廻せば、うんとものつけに倒れ伏す。「ハテ不思議や、近比下屋に忍び、君を守護する其折から、鼠と化して系圖の一卷、奪ひ取つて立退く曲者、何にもせよお家の系圖、此方へ奪返さん」と、立寄る松枝曲者は、むつくと起きて、「シヤ豎子、汝いかなる強盛なりとも、我又大室九丹金液經の法を行ひ、雲を起し雨を呼び、須彌山を抜き芥子に隠れ、自在を得たる我が幻術、汝も下界の鬼となさん。テレイキヤン、インテレイヒ、カウキヤン、テレビルヒイル」と、責めかけ／＼唱ふれども、更に奇瑞の見えざれば、節之助稀代の思ひ、「扱は外記左衛門が無念の精血血汐の穢れに、汝が仙術忽ち失せしは天の責、我君を守らせ給ふ氏神の御加護ならん、ハア有難や悦ばしや。サア此上は系圖の一卷、早く渡せ」「縦へ仙術失せたりとも、汝等如きに渡さんや、速にそこ立去れ」「こま言いはすと早く渡せ」「ヤア／＼明衡、其方筋無き事を申し、某を科に落さんと謀書を拵へ、剩證據などと指上けし其一卷、白紙を以て上を欺く、汝ばかりの科に有らず、主人鶴喜代落度と成つて、家の斷絶今此時、覺悟せよ明衡」と、鐔打ち叩いて詰かくれば、源五兵衛むくりを煮やし、「正しく館を出づるまで、紛ふ方なき連判狀、今白紙と成つたるも、汝が胸に深き巧、イデ糺さん」と立ちかゝる、明衡「暫し」と押し止め、「事に猛るは尤なれども、今荒氣を出し

ては、鶴喜代君のお爲にならぬ」「ぢやと申して」「先々待たれよ、何事も此胸に、先づく次へ立たれよ」と、老臣の詞是非なくも、しをく次へ立つて行く。梶原聲かけ、「ヤアく者ども、鶴喜代始め一家の奴原、悉く繩を掛け獄屋へ引け」「アイヤ先づ待たれよ梶原殿、貝田勘解由も暫く扣へよ。ヤイ明衡、證據と成るべき一卷の、白紙と成りしと云ふも偽、貝田を科に陥さん爲、汝一人が巧で有らう。左様なければ鶴喜代も、筋なき事を台聽に達し、上を恐れぬ科遁れず。其方一人落命せば、主人の身の上別條なし、天誠を照し給へば、死後に汚名は自然と雪がん、とくと思案を廻らし召され」「ハッ今に始めぬ重忠様の御厚情、粉骨碎身仕るとも、報じ難き御示、斯く成る上は何をか包まん、貝田勘解由に職を超えられ、我威勢を奪はれし其無念止む時なく、斯くまで仕込みし大望も、時至らねば悔みて返らず、此上の御願ひ、切腹御赦免下さらば」「オ、神妙の詞至極せり、其儀は梶原さし赦す、早く支度を仕れ」「ハッ有難く存じ奉る、跡々の儀は重忠様」「ホ、心置なく最期を清う」ハ、ハット御請も明衡が、無念の涙押隠し、心靜に手を合せ、南無松島大明神、弓矢神正八幡、奥州五十四郡を照し給はゞ、鶴喜代の御武運長久、我こそ武運拙くとも、死後には其覺明らけく、是非潔白を神國の、印を顯し給へやと、祈念の中に貝田聲かけ、「ヤア明衡、切腹とは武士の冥加、傍輩の

よし、某（かい）介錯（しやく）してくれん」「オ、過（くわ）分（ぶん）々々、腹一文字に搔切つて、イザと聲を懸くる迄、必ず
早（い）まり介錯（しやく）すな」と、無念の一言身も震はれ、「エ、天惡人に組せずとは、偽（いつはり）なるか、エ、奇怪
や、たとへ骸は死するとも、魂君の影身に添ひ、佞人原に目に物見せん」と、肩衣はね退け
座を組んで、差添に諸手を掛け、既に斯うよと見えたる所へ、「暫く待つた明衡殿、松枝節之助
是に在り、貴人出席の其中へ、陪臣の參會御免に預る」と、一卷片手に立出づれば、貝田聲か
け、「尾籠千萬、既に以て事極つた裁許を戻くは恐れ多し、早立去れ」と極め付くれば、からく
と打笑ひ、「汝が手足と頼んだる、常陸之助國雄を殺し、家の系圖奪返す、又砂川の屋敷にて、
傾城高尾平産の姫君、義綱公と諸共に害せんとする汝が問者、此方へ召し捕つて、うぬらが巧
の底叩かす、最早通れぬ覺悟々々」「ヤア舌長なり節之助、既に以て明衡が差上けたる連判狀、
一字一點無き白紙、是ち即慥な證據」「オ、其一卷こそ子細有り、國雄が幻術塞く上は、印ぞ有
らん明衡殿」實もと傍なる一卷を、開けば姓名有りくと、元の如くに鮮なり。明衡貝田を
はつたと白眼み、「禽獸に等しき汝、讀み聞かすに及ばねど、重ねて詞を出さぬ様、とくと夫に
て承れ。此度冠者太郎義綱、并に子息鶴喜代丸を退け且害せんと謀る事則ち成就せば、一味連
判の輩は、其功の輕重に應じ、恩賞高祿宛行ふ者也、錦戸刑部太郎國純、直衛」とまで讀

まぬ中、二つに成つて倒れ伏す。血刀引提け飛鳥の如く、奥の間へ駈込めば、續く松枝節之助、遁さじものと追うて入る。梶原俄にあわて出し、「貝田めが死物狂ひ、殊に松枝無法者、彼奴があばれ出したらば、我等はお座にたまられず。コレ、武勇自慢の重忠殿、組留めてたべ頼み入る」と、膝もがたく振ふる。重忠は脇目もふらず、「驚き入りし貝田が手の内、伊達治郎明衡が帶する所の刀諸共、速かに切放せしは適名作、是こそは先達で、紛失せしと略聞きたる、亂髪の一腰ならん。貝田が巧明白に現る其上に、家の重寶出づる事、鶴喜代の運目出たき所」と、劔戟を振る其中に、座席崩さず、優々として坐するたる、寛仁大度ぞ見事なる。次の一間は鐔音刃音、手に取る如く聞ゆれば、梶原猶も尻居らず、「アレ、爰へ来るさうな、コリヤどう致さう重忠殿」鳥コハ仰々し梶原殿、何の是しき子細なし、終日の對決に、拙者殆ど疲れ申す、氣を養ふは斯様の時、足下の手前で薄茶一服」壺一服やら立腹やら、切腹しやうも知れぬ時宜、薄茶どころで有らばこそ、折節風呂に火の氣は無し、爐の炭もつぎかへず、本の是が冷火燵、緩りとおあたりなされよ」と、尻に帆掛けて走り船、梶原這ふく逃げ出づる、貝田を中に熊川松枝、いづれ劣らぬ早業は、目覺しかりける次第なり。熊川は薄手を負ひ、貝田を足下に節之助、とどめをぐつと刺通せば、庄司重忠喜悅の眉、「オ、出かしたり

く、貝田が帶せし一腰は、亂髪みだれがみの一腰いちこしならん。系圖けいずの一卷いちくわん家の重寶、斯く一時に手に入る上は、錦戸刑部は遠流えんりゅうさせ、家の榮さかえは萬々ばんくぜい歳」と、仰おほせに兩人勇み立ち、祝いはひ壽こきく池いけの龜、千代の榮を鶴喜代の、威勢は朝日の登るが如く、實ひに神國の人心ひここころ、頼たのもしともなかくに、申すばかりは無かりける。

伽羅先代萩
終